

学術変革領域研究(A)「生涯学」事務局

Email: lifelongsciences@gmail.com

<https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp>

2020年度～2024年度 学術変革領域研究(A)

生涯学の創出

——超高齢社会における発達・加齢観の刷新



多様な成長と変容を繰り返す
新しい「人間の生涯」の理解をめざして

領域代表 月浦 崇
京都大学大学院人間・環境学研究科 教授

65歳以上の高齢者の割合が総人口の28%を超えている我が国にとって、超高齢社会に対して社会全体としてどのように対応していくのかは、喫緊の解決が求められる重要な社会問題です。これまでは、人間の生涯は「成長から衰退へ」という単純な枠組みでとらえられてきましたが、人生100年時代の到来とともに、従来のような固定的な生涯観だけで人間の生涯を理解することは難しくなってきました。そこで本領域では、従来の生涯観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返すプロセス(下図)としてとらえ直すことを目的とした、新しい学際的研究領域である「生涯学」を創出し、研究を展開します。

そのために本領域では、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する予定です。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざしていきたいと思っています。



領域概要

本領域の目的

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な発達・加齢観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返すプロセスとして明示することを目的とする。そして、人間に関する多様な学問分野を融合することで、新しい学際的研究分野としての「生涯学」を創出する。その目的を達成するため、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文

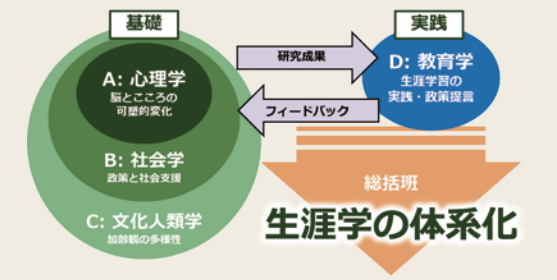
化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基礎的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する。本領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することをめざす。

本領域の内容

本領域では、既存の学問分野にとどまらない広範で多元的な研究を実施することで、従来の生涯観を刷新するための心理・社会メカニズムの解明とその社会実装を進める。

具体的には、高齢期でも獲得できる認知機能の性質と、高齢期には獲得しにくく衰退・消失してしまう認知機能の性質を若年者との比較の中で実験的に明らかにし、柔軟な可塑性が引き出されるメカニズムを明らかにする(認知心理学、生理心理学)。また、認知機能障害の実態とそれに関わる認知予備力について検討する(臨床心理学)。さらに、多様な実社会において、様々な世代や障害に対する適切な生涯観に依拠しつつ、新たな発達・加齢観の下で育まれる豊かな生涯を支えるために、効果的なソーシャルサポートとはどのようなものかを大規模社会調査から明らかにする(社会学)。そして、知識や技能の獲得過程と成熟過程もしくは消失過程が、文化や生活環境が違う場所ではどのように発現しているのか、社会制度や生態環境によってどのような影響を受けるのか、多様な人類社会においてどのような発達観や加齢観、ライフ

サイクルがあるのかを多様な社会集団に対するフィールドワークから明らかにし、それらの比較を通して多様な生涯観を相対化することで、新たな生涯観を生み出す社会的要因とその可能性と限界を探る(文化人類学)。そのうえで、これらの基礎的知見を基盤としつつ、地域や個人に即した社会教育プログラムを実践することで、新たな生涯観の中で実現される社会教育プログラムを実装する(教育学)。このようにして、人間に関する諸科学、すなわち心理学、文化人類学、社会学、教育学等を融合して基礎から応用への展開を進め、さらにそれらの研究を循環させることで、従来の発達・加齢観を刷新する新たな「生涯学」を創出する(下図)。



期待される成果と意義

本領域の中心的な成果は、「生涯学」という新しい加齢観に根差した学際的な研究領域を世界に向けて確立することであり、超高齢社会に有益となる新たな生涯観を社会へ提供することである。すなわち、新しい生涯観に裏打ちされた人間発達の实態を明らかにすることで、生涯発達という発想を社会に広め、人

間が年齢を重ねていく中でいかに柔軟性と多様性を持つ存在であるかを示せるはずである。また、脳機能の加齢による可塑的变化のメカニズムを理解し、それに基づいた教育法の開発も期待できる。それは同時に、新しい生涯観に基づく豊かな超高齢社会の実現に向けた科学的基盤を提供することでもある。

目次
Contents

領域代表挨拶02
領域概要03

研究クローズアップ

Features03◆
地域社会を機能させる
「高齢者の力」に迫る04
Features04◆
チンパンジーとヒトの
「高齢者の生きざま」を比較09

研究班一覧

研究組織図14
計画研究班一覧14

2024年度受賞報告19

2021-2024年度活動報告

アウトリーチ活動
「公開シンポジウム」開催報告20
「生涯学」領域会議開催報告22
東北大学社会教育主事講習への
「生涯学」の導入 4年目26
2023-2024年度活動報告一覧28
2020-2024年度業績一覧33

地域社会を機能させる 「高齢者の力」に迫る



笠井賢紀（公募B03-L201班 研究代表者）× 日高聡太（A01知覚・認知心理班 研究分担者）

笠井賢紀さんは、高齢者へのインタビュー調査を軸として、伝統的な集落や半世紀前に作られたニュータウンの地域社会を研究されています。A01知覚・認知心理班で高齢者の知覚を調べている日高聡太さんが笠井さんに、生涯学で目指すものを尋ねました。

記述されていない、 高齢者の“可能性”

日高：笠井さんはこれまで、日本各地の伝統的な集落で長く続いてきた風習である「左義長（さぎちょう）」や、「伊勢講（いせこう）」の調査をされてきたとのこと。そうした行事において高齢者の果たす役割が大きいことから、生涯学プロジェクトへの参加をお考えになったのでしょうか？

笠井：生涯学のコンセプトには、老いることを解消すべき「課題」としてではなく、ポジティブにとらえなおそうという意気込みが謳われていますよね。生涯学の公募研究に応募したのは、そこに非常に共感したことが大きな理由の一つでした。私が、地域社会と高齢者の調査をしていれば実感するのは、「高齢者本人や社会が気づいていないだけで、高齢者は多くの可能性をもっている」ということなんです。

日高：正月飾りを持ち寄って燃やす左義長や、お伊勢参りに関する宴を催す伊勢講は、いずれも神事に関係がありますね。宗教的な行事で高齢者に大きな役割が与えられていることで高齢者が生き生きして、地域社会がうまく回っていくのでしょうか。

笠井：実は、とりわけ高齢者に重要な役割が与えられているわけではないんです。左義長においては飾りを結わえるための蔓や燃やすための藁を調達するのは子どもたちの役目と決まっていますし、伊勢講で新年会を催す幹事役は輪番制が基本です。特定の誰かに権力が集中し、役割が固定化することのないこうした工夫が、これらの風習を長く続かせてきたのでしょう。

いま70代後半以降の高齢者にはこうした知恵が蓄積されています。現代社会ではあまり顧みられることがなく、ご本人たちも「仕事を引退して年老いた自分なんて役に立たない」と卑下されることがありますが、私は「いや、蓄積されてきた知恵は社会に必要なものではないか」と考えていまして、それを記述しようとしています。

日高：何百年と続いてきた左義長や伊勢講も、近年では生活スタイルの変化によって消滅する地域が多いと聞きます。それでも、高齢者が左義長や伊勢講で身につけてきた知恵は役に立つ、と。

笠井：はい。伝統的な風習を研究していると、「貴重な文化を守ろう」とか「古き良き時代に帰るべきだ」と考えているのだらうと思われがちですが、私は社会学者として、左義長や伊勢講などの民俗が社会をうまく回すために果たしてきた機能を明らかにしたいと考えて研究をしています。本質がわかれば、伝統的集落以外の場所にもそれを転用する可能性が拓けるのではないかと考えているんです。

日高：左義長や伊勢講はどのような機能を果たしてきたとお考えですか？

笠井：多様性を受容しようという文脈で、理想像として「共生社会」という言葉がよく使われますが、私は、共生社会とは「目指すべきもの」ではなく、多様な、ときには決して相容れないような価値観をもつ人間同士が否応なく一つの社会でともに生きていかねばならない“現状”のことだと思っています。

左義長や伊勢講は、価値観の違いにあまり左右されない「原初的な楽しみ」を必ず含んでいます。炎を囲む楽しみ、集まって酒を酌み交わす楽しみ……。そうした行事や準備作業に、時には嫌々ながらも全員が参加し、顔を合

わせて一緒に何かをすることを通じて個人間の軋轢がぼかされ、地域社会がうまく回っていく。

つまり、左義長や伊勢講などは、「共生社会をうまく回すためのレパートリー」ではないか。

日高：「レパートリー」とは、ユニークな表現ですね。パリエーションがあり、かつ、多くの人に予測ができるもの、ということでしょうか。

笠井：はい、料理のレパートリー、カラオケのレパートリーなどのように、いくつかの選択肢があり、当人だけでなくほかの人も「そうか、あれのことだな」と予測ができる。いまの高齢者は、共生社会のレパートリーを多く身につけています。

日高：地域社会が健全に続いていくには、血縁内だけでなく他世代との交流が必要だと言われますが、子どもに役割が与えられている行事ならそれも実現されますね。

笠井：そうですね、原初的な楽しみが含まれていること、神様やご先祖様、暦などにことよせた「物語」があること、子どもが参加すること、輪番制にすること、など、レパートリーとして残ってきたものには、さまざまな工夫が息づいています。海外でいえば、子どもたちが地域を練り歩き、お菓子をもらうハロウィンもそうしたレパートリーの一つと言えるかもしれません。

インタビューで 「手続き記憶」を 掘り起こす

日高：この生涯学プロジェクトでは、笠井さんは1970年代につくられたニュータウンも調査の対象とされていますね。ニュータウンには地域に根付いた行事、すなわち共生社会のレパートリーがないわけですが……。

笠井：はい、その代わりに自治組織がどのように運営されてきたかを調査しています。私の調査しているニュータウンでは、いまの高齢者が自治会の運営に重要な役割を果たしてきました。彼らが現役のときは企業社会でも組合運動が盛んで、そこで身につけたノウハウが、ニュータウンの自治組織にも見事に応用されていたことがわかりました。

とはいえ、70代後半以降の方々にお話を聞かせてくださいと頼みにいくと、「現役時代は技師だったから、その時の経験は自治会活動の役には立っていない」などと言われるんです。でも人生史を一通り聞いてみると、人の話を

人生の経験値など、長期的に蓄積されていく知性は結晶性知能と呼ばれ、加齢による衰えの影響は少ないと言われています。流動性知能を測るテストでは測れていないものが広く存在することをあらためて実感しています。



さまざまな場面に遭遇することで経験値が上がっていきますよね。それこそ、老いや死の受容に関してはさまざまな場面に立ち会うことで向き合い方が成熟していくものだろうと思います。

日高：こうしてお話をうかがっている現在、「生涯学」は全5年間の中間地点を折り返すところで、これまでの研究で見えてきたことを整理しているのですが、領域代表の月浦崇さんがキーワードとして挙げられたのは、加齢を「衰え」ではなく「成熟」としてとらえよう、ということでした。

笠井：年を重ねることのポジティブな面に目が向く言葉ですね。

日高：高齢者の知能を測るテストでは、言語や情報の処理能力、瞬発的な記憶力などを測るのですが、それらはもっぱら「頭の回転の速さ」の指標である流動性知能と呼ばれるものです。ただ、人生の経験値など、長期的に蓄積されていく知能は結晶性知能と呼ばれ、加齢による衰えの影響は少ないと言われています。知能テストでは測れていないものが広く存在することをいまあらためて実感しています。

いまの高齢世代のためだけでなく、 未来の高齢世代のためにも

笠井：一つ、忘れてはいけないこととして、高齢になったら自動的に経験値が上がるわけではないんですよね。私た

覚に関してはかなりの割合で困っている人がいて、ただし眼鏡やコンタクトの補助具によってそれを解決している。

その一方で聴覚に関しては、70代で困っていると答える人の割合が増えるには増えるものの、客観的なデータからすると聴覚がだいぶ落ちている人の数はずっと多いはずなんです。つまり、自覚されていない。

ということは、受容よりも前の段階なので、聴覚をネタにする(できている)人の数は70代でもまだ少ないでしょう。自覚がないと、会話がうまくいかなくなる。すると外界から入る情報が減ることで結果的に認知機能に悪影響が出る恐れもあるので、聴覚の衰えについてはより自覚してもらえよう発信したいところです。

笠井：「衰えないように〇〇をしましょう」と提示するための研究は数多く存在し、そうした研究はもちろん大事ですが、健康寿命は無限に伸ばせるわけではなく、必ず終わりがありますよね。日高先生のお話で、衰えを自覚・受容し、うまくつきあって生きていく方法を提示する研究の重要性に気づかされました。

加齢とともに 上がる知性

笠井：知覚と異なり、社会的には加齢につれて上がっていくものもあります。たとえば、先ほどお話した「共生社会のレパートリー」は増えていきますし、個人的にもさま

(公募E01-L208班 研究代表者、大阪大学)のお話によると、サクセスフル・エイジングとは、年を重ねても衰えないことではなく、「さまざまな方法で衰えをカバーしつつ、老いを受容して年を重ねていくこと」を指すのだそうです。

ここからは私の研究ともからむのですが、高齢になると視覚や聴覚などの知覚が落ちていきます。ただ、単に落ちるばかりではありません。会話の際に聴覚だけでなく視覚も手がかりにして全体を理解する、というように、ある知覚の衰えを別の知覚で補う傾向が実験を通じてわかってきています。

サクセスフル・エイジングの考え方とその知見を合わせると、加齢によってできないことが出てきたときに、すべての知覚を若いときのまま保とうと考えるのではなく、聴覚が落ちたけれど視覚で補えば会話は理解できる、とか、記憶力は落ちたけど手帳をつけて物忘れを防ごう、といった“自覚”と“補償”によって不便に対処しながら、老いを内面で受容していく、というプロセスが望ましいのだろうと推測しています。

ネタにして笑えるようになるには、衰えたという自覚を経て、受容が進んだ状態になることが必要なのではないかと思います。

笠井：日高さんは知覚の衰えの“自覚”に関する調査もやっていらっしゃいましたね。

日高：高齢者の日常生活における、感覚の「困りごと」を40代から70代の男女878人に尋ねてみました。すると、視



私は、共生社会とは「目指すべきもの」ではなく、ときには相容れない価値観をもつ人間同士が否応なく一つの社会で生きていかねばならない「現状」のことだと思っています。

伝統的な民俗の中に蓄積されてきた知恵は、そんな共生社会に必要なものではないか。

きちんとメモをとって聞くとか、弱い立場に置かれた人への配慮がある、とか、その人が人生で得てきたものが自治活動に生きていることは明らかなんです。ご本人が意識していないだけで。

日高：心理学では、人間の記憶には自分できちんと意味や内容を説明できる「宣言的記憶」と、包丁の使い方や自転車の乗り方のように、身体に染みついているが自分で説明するのは難しい「手続き記憶」がある、としています。インタビューされた方は宣言的記憶をもとに話しているのだけれど、笠井さんは手続き記憶を掘り起こされているのかもしれないですね。

笠井：なるほど、そのように分けて考えてみたことはありませんでした。頭が整理されます。

視覚の衰えはネタに できるが、聴覚は？

笠井：高齢者の加齢と知覚の関係を心理学的に研究されている日高先生に、純粋な興味から、ちょっと伺ってみたいことがあるのです。人が自身の老いを「ネタ」として笑いにできるのはどれぐらい衰えたときなのでしょう？ たたとえば40代だと「老眼ネタ」はかなり一般的ですね。でもほかの知覚ではあまりないような。

日高：「サクセスフル・エイジング」という語をご存じでしょうか。生涯学に参加されている、心理学の権藤恭之さん

研究
クローズアップチンパンジーとヒトの
「高齢者の生きざま」を比較

アフリカの野生チンパンジーを研究している松本卓也さんが、生涯学プロジェクトの公募研究に参加されました。類人猿のフィールドワークは生涯学にどのような示唆をもたらすか——。実験心理学を専門とするA01知覚・認知心理班の寺本渉さんが伺います。

野生チンパンジーで
「おばあちゃん仮説」を
検証してみよう

寺本：生涯学の研究はこれまで、ほぼすべてがヒトを対象としたものでした。チンパンジーの研究者である松本先生が加わられたことによって、種を超えて、つまり「生物」とし

て加齢をとらえなおせるのではないかと非常に期待しています。

松本：ありがとうございます。チンパンジーは遺伝的にヒトに最も近い種ですし、寿命もそれなりに長いので、生涯学における種間比較の対象として興味深い存在だと思います。

寺本：チンパンジーの寿命はどれぐらいですか？

ち現役世代は、いまの70代後半以上の高齢者が蓄積してきたような共生社会のレパートリーを学ぶ機会がさほどないまま年を重ねつつあります。私たちが社会に出たときには組合運動などもすでに下火になっていましたし、地域社会に関わりを持たずに暮らしてきた人も多い。地域の共生社会をうまく回す経験値は総じて低い状態と言えます。

私たちの世代が高齢になったとき、街づくりや超高層マンションのコミュニティなどの新たな文脈で、既存の様々なレパートリーに含まれていた工夫を転用するとうまくいくこともあるでしょう。

いま、この研究をやっておくことの意義は、いまの高齢者の可能性を明らかにするだけでなく、将来の高齢世代がいまの高齢世代と同じぐらいに、あるいはもっと大きな可能性を見いだせるぐらいに成熟するためには何が必要

かを明らかにすることにもあるのではないかな。

古きよきものを守ろう、高齢者を尊敬しよう、ではなく、いまの現役世代、子ども世代にとってのよりよき未来のための研究でもあると思います。実はこれまでにそのように考えたことはなかったのですが、今日、日高さんとお話していて気づかされました。ありがとうございます。

日高：私こそ、高齢者の可能性や心理学の手法で測れないものについて多くの発見がありました。いい機会をありがとうございました。

※左義長や伊勢講は地域によって違いがあります。本記事では笠井賢紀さんの研究対象地域(滋賀県栗東市)の事例に基づいて対談を行いました。



日高聡太（ひだか そうた）
上智大学 総合人間科学部 教授

東京都出身。立教大学などを経て2023年から現職。実験心理学を専門とし、「生涯学」においてはA01知覚・認知心理班(研究代表者寺本渉)の研究分担者として、高齢者の知覚の加齢変化、多感覚情報処理について研究している。「生涯学」に関する最近の研究業績として、『高齢者の日常生活における感覚の困りごとに関する検討——中年者群を含めた検討』(「心理学研究」)など。



笠井賢紀（かさい よしのり）
慶應義塾大学 法学部 准教授

北海道出身。横須賀市役所、龍谷大学などを経て2022年より現職。生活史の聞き取りを軸として、住民自治組織や民俗など、地域社会のありようを調査・研究してきた。著書に『栗東市の左義長からみる地域社会』(サンライズ出版)、共編著に『共生の思想と作法——共にによりよく生き続けるために』(法律文化社)、『パブリック・ヒストリーの実践——オルタナティブで多声的な歴史を紡ぐ』(慶應義塾大学出版会)など。「生涯学」においては、公募B03-L201班研究代表者として「高齢者の地域社会貢献活動についての社会学的研究——地域史と人生史の分析を通じて」に取り組む。



寺本渉(A01知覚・認知心理班 研究代表者) × 松本卓也(公募E01-L203班 研究代表者)



私は実験心理学が専門です。
さまざまな条件を整え、つまり「操作を加えて」
ヒトの行動や反応を観察する分野なので、
野生チンパンジーを対象にした研究が
どのように進められるのか、興味があります。

松本：ヒトと同様、一口に何歳とは言えませんが、野生では50代が最高齢と言えそうです。

寺本：となると、何歳以上が高齢チンパンジーとされるのですか？

松本：いろんな定義がありますが、私の研究では、生物学的な年齢や見た目で区切って“高齢”な個体を対象にするのではなく、「娘と孫をもつメス」に注目しようと考えています。

チンパンジーは雌雄が複数集まって集団を形成し、集団のなかでは乱婚です。メスは生殖可能な年齢に近づくと別の集団に移籍し、出自集団とは完全に縁が切れます。ですから、基本的にメスは自分の娘の子、つまり孫に会うことはありません。

ところが観察を続けるうちに、私は、出自集団から出て行かないメスが一定の割合でいることに気づきました。さらに、そうしたメスが出産して「祖母と孫」という関係が生まれ、祖母が孫の世話をする様子も確認しています。

そこから、閉経後のメスの長寿について、「自分の子を残すという点では閉経後のメスが長生きすることには意味がないように見えるが、自分の子や孫を助けることで自分の遺伝子をより多く残すことに貢献している」と説明する「祖母仮説」の検証ができるのでは、と思い立ち、生涯学の公募研究に応募しました。

また、チンパンジーのオスは、乱婚社会ゆえに誰が自分の子や孫かわからないとされていますが、もしかしたら実

際はわかっていて、狩りに成功したときに優先して肉をわけてあげたり、ふだんの生活で優先的に遊んであげたりしているかもしれません。

「高齢」とまでは言えないかもしれませんが子をもてる程度に年長になったオスが、その後、加齢によってただ体が衰えていくだけでなく、なんらかの役割をになっているかどうかを見てみたいと思っています。

寺本：加齢の兆候ははっきりわかるんですか？

松本：老眼なのか、毛づくろいのときに手元からぐっと目を離すような仕草をしたり、体毛に白い毛が増えたり、という変化はあります。ただ、メスに閉経があるかどうかはわかっていません。

行動観察、人口動態データ、DNA分析の合わせ技で挑む

寺本：いわゆる“高齢”チンパンジーの役割を、どうやってたしかめるのですか？ 私は実験心理学が専門で、さまざまな条件を整え、つまり「操作を加えて」ヒトの行動や反応を観察する分野なので、野生チンパンジーを対象にした研究がどのように進められるのか、興味があります。

松本：たしかに、私の研究は寺本先生と対照的に「できるだけ操作をくわえずに」ありのままを観察する研究です。どちらかというと文化人類学の研究に近いですね。

私の調査地は東アフリカのタンザニアで、野生チンパン

ジーの野外調査がおよそ60年続いてきたマハレという場所です。そこで暮らすチンパンジーたちの個体識別をして、ひたすら森の中で彼らにくっついて歩き、行動を観察・記録します。操作は一切しないので、たとえば、祖母仮説の検証をしたいというテーマをもっていても、それを検証できるような行動が観察できるとは限りません。

ただ、すでに祖母—娘—孫関係が確認できているメスたちがいるので、彼女たちの生活をつぶさに観察することが本研究における中心的な調査となります。

寺本：オスの役割はどう調べるのですか？ チンパンジーは、母子は常に密着しているから親子関係は明らかですが、父子関係は人にはわかりませんよね？

松本：採取した糞のDNAから調べます。観察対象の集団のオスと子どもたちの父子関係を調べておき、肉の分配や遊んであげる行動を観察して、あるオスが特定の子を優遇しているかどうかを記録して血縁の有無とすりあわせる、という形です。

また、公募研究の2年間の行動観察だけでは量的な考察は不可能ですが、マハレにはチンパンジーの人口動態データが数十年にわたって蓄積されています。データをもとに、“高齢”のオスやメスが、自身の繁殖行動以外に子孫を残すことにどれだけ貢献しているかを探れればと思っています。

寺本：いまのところ、祖母仮説や、高齢オスの役割は「ありそう」なのでしょうか？

ヒトという種が共通してもっている「生涯観」の思い込みのようなものを発見するきっかけになればと思っています。他者のなかにとっぷり入ってみたいと、自分たちの特殊性には気づきませんから。



松本：まったくわかりません。祖母仮説は生物学的に非常に魅力的な仮説ですが、どの動物でも検証は非常に難しい。けれどチンパンジーで祖母—孫関係が観察できるなら検証できる可能性がある。だからトライしてみよう、という段階です。

「サクセスフル・エイジング」への示唆になるか？

寺本：いま「サクセスフル・エイジング」に注目が集まっています。生涯学プロジェクトでも、ヒトは生物学的には衰えていくけれど、それだけが加齢ではなく、加齢のポジティブな側面にも目を向け、加齢をとらえなおそう、という方向性を打ち出しています。そうした観点からすると、松本先生の研究はどのような示唆をもたらすと期待できるでしょうか？

松本：生涯学では、「ヒトは生まれ、成長し、ピークを迎えたあとは衰えていく」という一面的な生涯観を相対化しようとしているのだと理解しています。チンパンジーで高齢個体の社会的な役割がわかると、高齢チンパンジーもただ生物学的に衰えていくだけの存在でなく、「社会と関わり、高齢ならではの他者との関係性をつくっていく存在」と考えられ、旧来の生涯観をとらえ直すきっかけを提供できると思います。

寺本：仮に「チンパンジーでも祖母仮説が成り立つ」「高齢個体にはこのような役割があった」となったら、「ヒトの

高齢女性もそうした役割を果たしながら生きることがサクセスフル・エイジングにつながる」と言えますか？

松本：いえ、「チンパンジーが、あるいは自然界がこうなっている」ということがわかったとしても、「だから人間もそのようにあるべきだ(それが幸せだ)」という話に持っていくことはできないですね。

私が明らかにしようとしている“役割”とはあくまで生物学的に「その個体が自分の子孫を残すことにどれだけ寄与したか」という観点で見たものです。

高齢になっても生物学的な役割があるという事実がわかったから、高齢者も社会に存在する価値がある、というように、「事実(＝である)」を「価値(＝べき)」の話に変形するのは論理的に無理がありますし、そうした価値付けは容易に反転して「役割を果たしていない人は価値がない」という話になってしまいます。

祖母仮説や高齢オスの役割の検証は、人間の高齢者の価値や存在意義を肯定したり否定したりするための研究ではなく、あくまで生物学的な関心から始めたものです。

寺本：なるほど。では、この研究で「種間比較」をしたい、というのはどういう意図ですか？

松本：生涯学で刷新しようとしている生涯観は、現代日本の生涯観ですよ。ほかの地域の生涯観とすりあわせれば、現代日本の生涯観、自覚せずに「当たり前だと思こんでいた生涯観」がゆさぶられ、それを相対化するきっかけとなる。それが文化人類学班がなさっていることだと思います。

同じことを、地域や文化の違いによる相対化ではなく、種の違いによって、ヒトという種が共通してもっている思い込みのようなものを発見するきっかけになれば、と思っています。他者のなかにどっぷり入ってみないと、自分たちの特殊性には気づきませんから。

寺本：文化人類学にはできず、類人猿研究だからできることはありますか？

松本：人間を対象とした場合、簡単にDNA分析による父子判定ができないといった理由から、「その行動があったから生き延びられた、子孫を増やせた」(＝適応的に意義がある)ということを検証するのはなかなか難しいだろうと思います。いくらでも解釈の余地が生まれてしまう。一方で、チンパンジーの研究は生物学的な基盤のもとで、人口動態データやDNA分析の結果によって適応的な意義を検証しやすい、という違いがあると思います。

孫の世話は高齢チンパンジー自身に利益がある？

寺本：松本先生の過去のご研究で、チンパンジーの赤ちゃんの離乳時期に関する論文がありました。離乳の時期を乳児の目線で考えてみると外から見た時期とは異なるという報告です。乳児の目線でとらえる、という点に興味を引かれました。

そこから思いついた疑問なのですが、祖母仮説においては、子孫が享受する利益にフォーカスが当たりがちです。でも、祖母自身が利益を受けることはないでしょうか？たとえば孫の世話を通じて社会的な関係が充実するなど……。人間だと、他者との関わり、すなわち社会的な活動が高齢者の認知能力の維持によい効果があるという報告が増えています。チンパンジーでもあるのでしょうか？

松本：たしかに、赤ちゃんをつれたメスたちは互いの子がじゃれあって遊ぶため、近くにいることが多くなります。それによって毛づくろいなどが増え、社会関係が広がったり密になったりしているかもしれません。ただ、最初の前提として、そもそもメス本人にとって社会活動の活性化が「よいこと」かどうかはわからないんですね。

寺本：なるほど。ちなみに、認知症の高齢チンパンジーはいますか？

松本：わからないですね……。認知症にかかわらず、見慣れない行動や変化が観察されたときに、それを加齢や認知症によるものと断定することができないんです。単に本人の個性や、その場の状況に応じて出てきた行動かもしれないので。

寺本：白い毛が増える、などのわかりやすい見た目の変化以外に、高齢チンパンジー特有の行動の変化は見られない、と。

松本：観察例がないわけではないんですけどね。たとえば、昔、研究者がサトウキビでチンパンジーを餌付けして観察していた時期があるのですが、それを覚えていた高齢のオスが、最近、観光客の宿泊施設の外にうっかり置きっぱなしになっていたサトウキビを偶然見かけて食べたんです。そうしたら、サトウキビを食べたことのないほかの若いチンパンジーが真似をして食べ始めた、ということがありました。ただ、そのような「高齢で経験を重ねたことによる知恵」がほかの個体に影響を及ぼすような事例はそうそう観察されるものではないので、少ない事例を一般化して何か

を論じることはできないんです。

寺本：そこが実験心理学との大きな違いでもありますね。私はDNAメチル化などのように、できるだけ客観的な指標で加齢や高齢をとらえる方法になじみがあるので、そのような向き合い方は新鮮です。

論文になりにくい重要な問いを議論できる場が「生涯学」

松本：実験心理学のように厳密に条件をそろえたり被験者を集めたりすることはないにせよ、私も、論文では一定の枠組みや基準を定め、それをどのように検証しうるか、データから何が言えるかを書きます。生涯学の公募研究でもそれを一つの成果として目標としています。

一方で、「その枠組みでいいのか?」「そういう基準は妥当なのか?」という問いはいつも持っていて、それは論文のなかで議論するよりも、こうした対談や領域会議での議論によって、考えを深めていけたらと思っています。

たとえば、寺本先生がさきほど投げかけてくださったような、「祖母仮説がチンパンジーで検証されたら、人間の高齢女性にも役割があると言えるか」という問いをいただいたら、「なぜ、人間の女性にばかり祖母仮説的なもの(つまり存在意義)が必要とされるのか」という問い返しができるかもしれません。

ヒトの男性も高齢になれば精子の活性や子育ての体力が下がるので、繁殖という意味では存在意義は下がる。役割だけで考えるならば、祖父仮説だって必要だという話になります。個人的には、人が生きる価値を「役割があるかないか」で決める必要はないと考えていますが。

そうした「枠組み自体を問うこと」「枠組みを応用することの問題」はなかなか論文にはなりませんが、「生涯学」のような場所で、こうしてさまざまな分野の方と議論できることはとてもありがたいです。

寺本：私自身も、実験心理学とは性質の異なるアプローチで研究なさっている松本先生のお考えが伺えて、非常に刺激を受けました。調査の進捗を、そしてその後の議論を楽しみにしています。



寺本 渉(てらもと わたる)
熊本大学大学院 人文社会科学研究所 教授

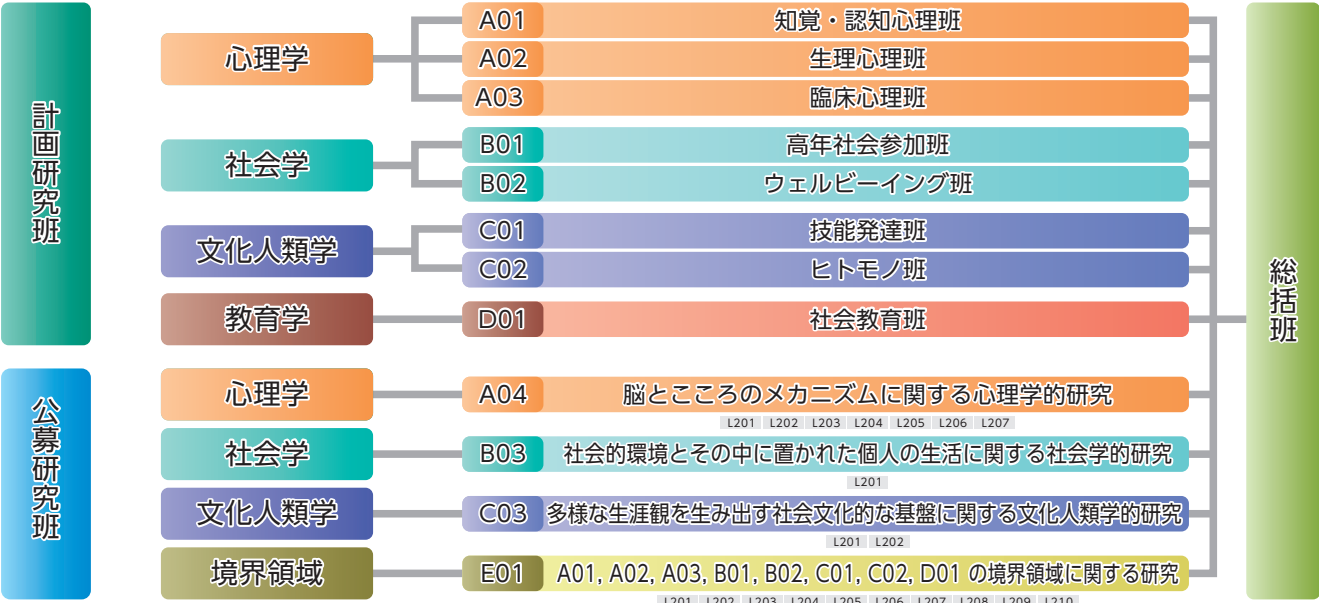
秋田県生まれ。専門は知覚心理学・認知心理学。脳波計やfMRI、VR装置など多様な装置を用いて、人間の知覚の身体性や多感覚統合を明らかにする研究に従事している。2004年神戸大学大学院文化学研究科で博士号(学術)取得後、産業総合研究所やドイツのマックス・プランク研究所、東北大学電気通信研究所での研究を経て、室蘭工業大学大学院工学研究科准教授に。2015年熊本大学文学部に着任し、2018年より現職。「生涯学」においては、AO1知覚・認知心理班の研究代表者を務め、「知覚系の知識獲得機構の加齢変化」に取り組む。



松本 卓也(まつもと たくや)
信州大学 学術研究院 理学系 助教

奈良県出身。京都大学大学院理学研究科生物科学専攻動物学系(人類進化論研究室)で、京都府嵐山に生息するニホンザルや、タンザニアのマハレ山塊国立公園に生息する野生チンパンジーのフィールドワークを行い、2019年に博士号(理学)取得。2021年より現職。チンパンジー調査を続けながら長野県の地獄谷野猿公苑や上高地などのニホンザルの調査も行っている。「生涯学」においては、公募E01-L203班研究代表者として「野生チンパンジー社会における高齢個体の生き様——人口動態と行動観察による再定位」に取り組む。

研究組織図



計画研究班一覧

A01

知覚・認知心理班 (認知心理学)

知覚系の知識獲得機構の加齢変化



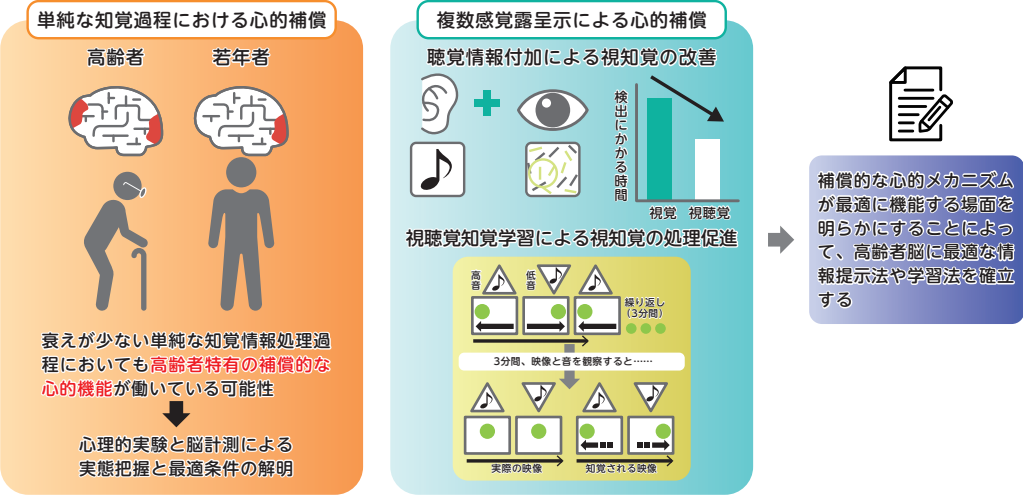
代表者
寺本 渉
熊本大学大学院
人文社会科学部 教授

分担者
日高 聡太
立教大学 現代心理学部 教授

川越 敏和
東海大学 文理融合学部 講師

研究概要

本研究では、特に複数感覚情報の処理に着目し、高齢者における心的な補償機能の存在を確認し、そのメカニズムを明らかにすること、そして、高齢者、ひいては人間が本来もつ知覚・認知の可塑性を最大限に引き出し、より豊かな生活をおくるための方法を提言することを目的としている。現在までに、身体運動機能が低下した高齢者において、身体位置感覚や身体所有感において視覚情報による補償が顕著にみられることや、行為の結果を知覚する際、特に実行機能の低下した高齢者では、感覚情報よりも知識を優先する傾向があることなどを明らかにした。その他、音知覚や注意システムにおける補償や顔知覚の加齢変化等について、身体運動機能、実行機能、社会的機能との関連性に着目しながら検討を進めている。



生理心理班 (生理心理学)

A02

記憶における加齢と社会性の相互作用の基盤となる脳内機構



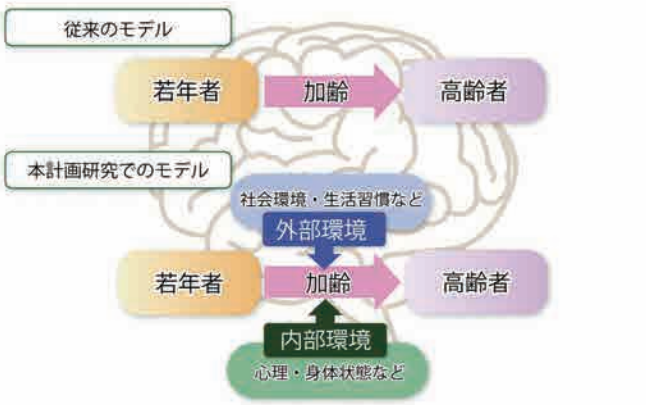
代表者
月浦 崇
京都大学大学院
人間・環境学研究所 教授

分担者
朴 白順
弘前大学大学院 保健学研究科 准教授

上田 竜平
京都大学 人と社会の未来研究院 助教

研究概要

本計画研究では、ヒトの記憶の加齢による経年変化を脳の器質的变化だけで説明するのではなく、社会的環境との相互作用の中で、どのように脳内メカニズムが可塑的に変化するかを視点から解明することを目的とする。その目的を達成するために、健康若年成人と健康高齢者の記憶に関連する神経メカニズムを脳機能画像研究から検証すると同時に、脳機能画像研究で得られた知見の機能的妥当性を明らかにするために、神経疾患患者を対象として神経心理学的手法によって検証する。これまでの研究では、他者との社会的関係によって影響を受ける記憶の神経メカニズムとして、眼



窩前頭皮質と海馬の相互作用メカニズムが重要であることや、デフォルトモードネットワークと前頭頭頂ネットワークの2つの脳機能ネットワークが、共感性と主観的幸福感を媒介することが認められている。また、表情のような顔に由来する社会的信号の処理に関わる神経表相が加齢によって変化することや、表情による顔記憶への影響の基盤となる神経ネットワークが加齢によって変化することも明らかにされている。今後も継続的に本研究テーマを掘り下げていくことで、当初の目的に対して多角的にアプローチしていく予定である。

臨床心理班 (臨床心理学)

A03

認知機能からみたこころの健康へのアプローチ
——予防とレジリエンスのために



代表者
松井 三枝
金沢大学 国際基幹教育院
臨床認知科学 教授

分担者
吉澤 浩志
東京女子医科大学 脳神経内科 准教授

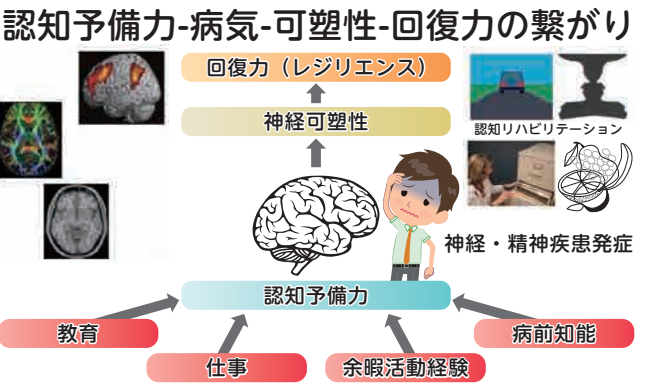
菊谷 まり子
金沢大学 国際基幹教育院 准教授

中田 光俊
金沢大学 医薬保健研究域医学系 教授

木下 雅史
金沢大学附属病院 講師

研究概要

認知機能という観点から、統合失調症および青年や成人とくに高齢期までの脳器質性疾患、認知症や気分障害について検討する。これらの疾患では認知機能障害がしばしば認められることが知られており、日常生活機能や精神機能の維持および社会復帰には認知機能の問題が大きいと考えられる。これまで健康成人のメンタルヘルスと適応性の調査を行ない、認知予備力との関連を検討してきた。さらに、脳腫瘍患者、認知症患者および精神疾患(統合失調症と気分障害)の認知機能と認知予備力と



の関連を調べてきた。さらに、これらの患者の認知機能と認知予備力の検討をおし進め、社会復帰や術後回復力の予測データを精神疾患(統合失調症と気分障害)の認知機能と認知予備力との関連を検討することにより、神経可塑性への寄与を明らかにする。このことにより、新しい生涯観の下で人間の一生を支える脳とこころの機能維持に資する機構の解明に寄与することをめざす。

高年社会参加班(社会学)

B01

高齢者の社会参加の家族的・社会的条件の探索



代表者
筒井 淳也
立命館大学 産業社会学部 教授

分担者
菊澤 佐江子
法政大学 社会学部 教授
竹内 麻貴
社会保障・人口問題研究所 国際関係部 第2室長
田中 慶子
明治学院大学 社会学部付属研究所 研究員
Li Wenwen
立教大学 社会学部 助教
渡邊 大輔
成蹊大学 文学部 教授
西野 勇人
東日本国際大学 健康福祉学部 専任講師
安元 佐織
大阪大学大学院 人間科学研究科 准教授

研究概要

本計画研究班では、申請時の研究目的であり引き続き「生涯学」の重要なテーマである高年期の社会参加について、社会調査データをもとに探究することを主目的としている。ただしこの課題は2023年度に予定されている大規模調査を活用することになるため、今年度はそのための準備期間となる。幾度かの研究会を通じて、出生コーホートなどを組み入れたライフコース論を組み入れることで、既存研究と異なった視点から、社会参加の変化と現状、そして将来についての見通しを与えることがめざされる。

また、生涯学の領域全体の目標



は「生涯観の刷新」であるが、本計画研究班では、この課題に直接に関連するデータの収集を今年度実施するインターネットモニター調査を通じて行う。人々はどんな「生涯観」を持っていて、それはその人が置かれた環境や

人口学的特性(性別、出生年代、学歴など)に応じてどのくらい異なっているか。こういった、「生涯観」を考える上で必要な基礎データになることが期待される。

ウェルビーイング班(社会学)

B02

ウェルビーイングの規定要因に関する実証的研究

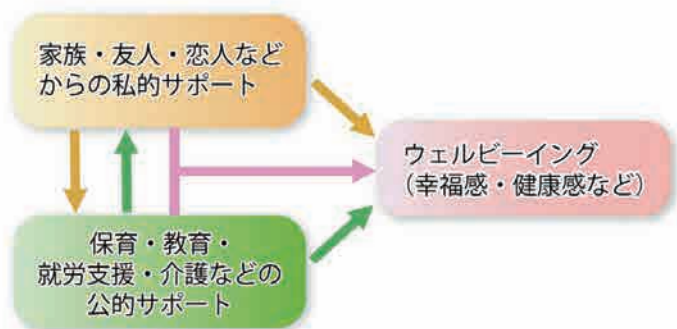


代表者
柴田 悠
京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授

研究概要

本研究では、本領域「生涯学」がめざす「豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明」とその成果の「社会実装」に向けて、現代日本社会における「豊かな人生」つまり「ウェルビーイング(幸福感・健康感など)の高い人生」の社会的要因をさぐる。

具体的には、幼少期から青年期、壮年期、高齢期にかけて、ライフステージの各時期にどのような私的サポート(家族や友人など身近な人からのサポート)や公的サポート(保育・教育・就労支援・介護など)を受けることが、その後の人生でのウェルビーイ



ングにどのように影響するのかを検討する。そのために、生涯の各時期に受ける私的サポートと公的サポートを詳細に把握する、日本で初めての大規模な質問紙調査(ウェブ調査と郵送調査)を実施する。2021年にはウェブ調

査を実施して分析を行った。その分析結果をふまえて、2023年には郵送調査を予定している。これらの調査により、どのような社会関係や支援が「ウェルビーイングの高い人生」をもたらすのかを検証し、実践的・政策的示唆を得ることをめざす。

技能発達班(文化人類学)

C01

技能・熟練・暗黙知の習得・発達過程に関する人類学的研究

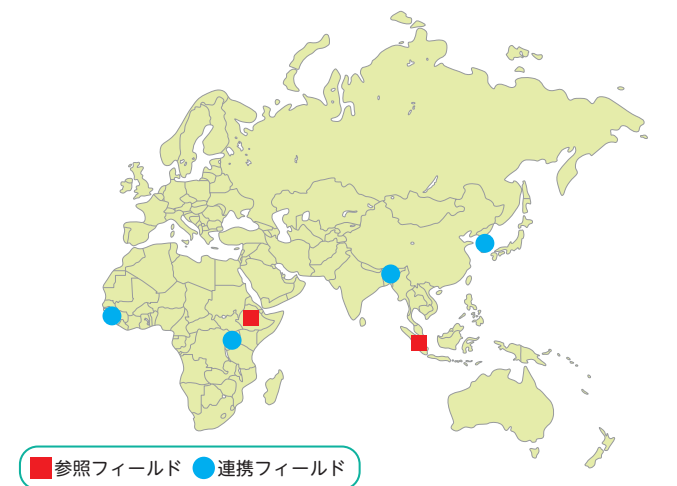


代表者
金子 守恵
京都大学 アフリカ地域研究資料センター 准教授

分担者
重田 真義
京都大学 アフリカ地域研究資料センター 特任教授
山越 言
京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 教授
伏木 香織
大正大学 文学部 教授
座馬 耕一郎
長野県看護大学 准教授

研究概要

本研究は、アジアやアフリカ大陸に暮らす技能集団が身体を通じて暗黙知を体得する過程に焦点を当て、担い手たちの1) 生物学的発達を示す行動調査、2) 身体技法の習熟度、3) 発達段階の文化的制度化の相関性について精査し、文化人類学的な比較検証を行う。これまでは、アジアやアフリカのさまざまな地域に暮らす技能集団に見出される製作技術や演奏方法を描きだし、製作者が年齢や経験を重ねることによって技能を熟練させていくことを指摘してきた。その一方で、作りだされたものやその技術が、製作者の年齢や経験



とは関わりなく、周囲の人々から評価されていることもあきらかになっている。技能の習熟とは、製作者が特定の身体の動かし方を会得する過程であると同時に、彼女ら／彼らの人格形成にも影

響を与える営みであることが示唆されている。引き続き技能集団に注目して、多面的な発達過程を描き出し、「生涯学」がめざす従来の生涯観を刷新することをめざす。

ヒトモノ班(文化人類学)

C02

生涯を通したヒト-モノの関係性の生成と変化に関する人類学的研究



代表者
倉田 誠
東京医科大学 医学部 教授

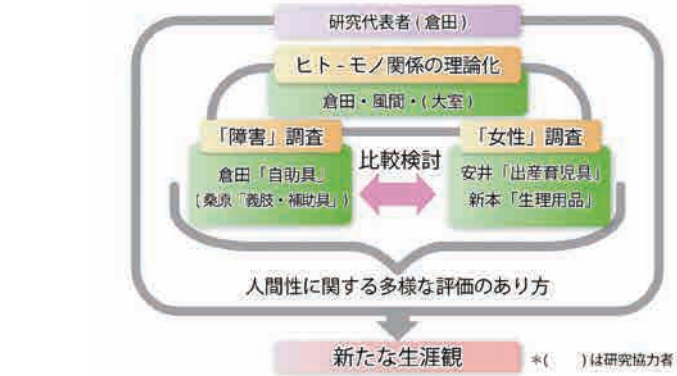
分担者
風間 計博
京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授
安井 眞奈美
国際日本文化研究センター 教授
新本 万里子
広島市立大学 客員研究員
紺屋 あかり
明治学院大学 国際学部 専任講師
山本 健太
神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 助教

研究概要

本研究班では、日本やオセアニアの諸社会において身体や認知の障害を軽減したり、性差による生理的变化や社会的役割に対応したりする際に使用・装用される様々なモノに着目し、1)それらが社会に導入され個々の身体に馴染んでゆく過程、2)それらを用

いる人びとの用法や動作の変化、3)それらを身につけ用いながら生きてゆくことに対する社会的評価、を行動観察やインタビューを主とした継続的な調査によって明らかにする。コロナ・パンデミックによって海外調査の実施が困難な状況のなかで、本班はこれまで

国内での共同調査を中心にデータや知見の収集とそれらの検討を行ってきた。今後は、研究分担者・協力者が各自のフィールドにおいて海外調査を実施するとともに、国内調査で構築した基盤を活かして「生涯学」の社会実装の可能性を探ってゆく予定である。



社会教育班(教育学)

D01 生涯学習に関する国家政策および地域主導計画の東アジア的視座からの検証



代表者
石井山竜平
東北大学大学院
教育学研究科
准教授

分担者
上田孝典
筑波大学 人間系 准教授
李正連
東京大学大学院 教育学研究科 教授
上野景三
西九州大学 子ども学部 教授
山口香苗
秋田大学 教育文化学部 専任講師
西川一弘
和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹 准教授
小山竜司
神奈川大学 法学部 教授

研究概要

本研究の目的は、1)一連の計画研究から得られた知見を、各自自治体の社会教育・生涯学習の担当者や教職員向けの講習・研修、およびこれからの生涯学習計画にパイロット的に実装することにある。並行して、2)東アジアと日本における生涯学習政策・実践を比較検証しつつ、3)地域主導

の生涯発達支援や、地域人材育成計画の新展開に加担していくことで、政策と実践の双方への実装を目指す。社会実装をめぐることは、2021・22年度、東北大学社会教育主事講習に生涯学習に関する授業を導入。加えて、自治体職員有志と学習会を行い、社会実装の可能性を検討中。「日本の生

涯学習政策検証」班は、2022年1月(東北大)及び8月(南三陸)、当時の政策の中枢者と、当時政策を批判的に分析していた研究者との対話を仕掛け、重ねている。「東アジア」班は、23年11月、中国・韓国・台湾から参加を得て「東アジア生涯学習研究フォーラム」を沖縄・名護にて開催。



総括班

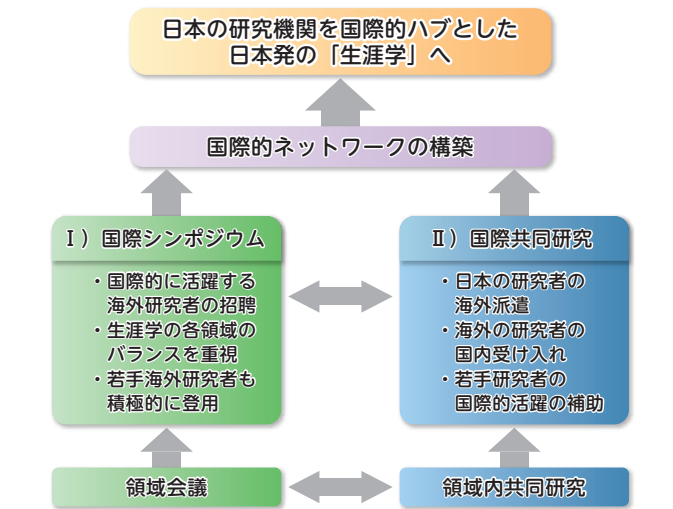
生涯学の創出——超高齢社会における発達・加齢観の刷新



代表者
月浦 崇
京都大学大学院
人間・環境学研究科
教授

研究概要

本領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な生涯観を刷新し、その成果を社会へ還元していくことをめざしている。そのために、総括班では以下の3つの方策を推進する。
1)定説を打ち破り、新たな「生涯観」を提唱する
・領域代表者による各計画研究のマネジメント支援
・若手研究者に多くのチャンスを与えるような公募体制の構築
2)多様な研究領域を連携・融合する
・年2回の領域会議の開催
・領域内交流プログラムの運営
3)新しい研究領域としての「生



涯学」の国際的プレゼンスを高める
・国際シンポジウムの開催
・国際共同研究の推進(若手研究者の双方向的な国際交流)
・国際研究発表の補助

2024年度 受賞報告

受賞報告

「生涯学」プロジェクトの一環として推進された研究が、その成果を学界に認められ、各学術団体の定める賞を授与されました。ここにその概要を報告するとともに、受賞研究者の所感を紹介します。

受賞

栗屋潔学術奨励賞

「聴覚による身体近傍空間の方位依存性の検討」

寺岡 諒(公募A04-L108班 研究代表者)

授与者：(一社)日本音響学会
授与：2024年9月5日

空間と身体の調和を科学する

「生涯学の創出」プロジェクトにおいて、公募A04-L108班の研究代表者として参画させていただいております。この度、本プロジェクトの一環として取り組んできた研究が評価され、日本音響学会第56回栗屋潔学術奨励賞を受賞いたしました。本記事でその報告と、今回の受賞を通じて考えたことについてお話をさせていただきます。

受賞の対象となった研究は、「聴覚による身体近傍空間の方位依存性の検討」に関するものです。身体近傍空間(Peripersonal space)は、身体の近くの空間(身体から約70cm程度の範囲)を指し、私たちが物を掴んだり、接近する危険を察知・回避したりする際に重要な役割を果たします。本研究では、身体周囲360°全方向を対象に、我々の脳が身体近傍空間をどのように知覚しているのかを調査しました。特に、背後の空間は視覚情報が得られないため、身体近傍空間の役割が他の方向とは異なる可能性があるという仮説を立て、研究を進めました。この点が従来研究との差異であり、今回評価いただいた理由の一つだと考えています。

この研究を始めるきっかけは、「生涯学」プロジェクトにも参画される寺本渉先生(A01知覚・認知心理班 研究代表者／熊本大学)との議論から生まれました。2018年当時、博士課程に在籍していた私は、ドイツ・ウルム大学にサバティカルで滞在されていた寺本先生を訪問しました。その際、先生のドイツのご自宅でワインを飲みながら行った議論が本研究の出発点となりました。議論の中で「身体の背後空間における聴覚の役割」についての話題が挙がりました。この議論は、当時博士論文の研究に行き詰まりを感じていた私に新たな方向性を示すものでした。その後、日本学術振興会特別研究員(PD)として寺本研究室に在籍した期間に、当時の議論をヒントにこの研究を開始しました。その成果が今回評価されたことは、非常に感慨深いものがあります。

この研究は、「生涯学」プロジェクトにおけるテーマの一つである、人間の適応性・可塑性に対する理解にも貢献する成果

であると考えています。身体近傍空間は、危険を回避し、他者や物との適切な距離感を保ちながら、安全で効果的に行動するための知覚的・認知的な基盤です。高齢者は感覚機能や運動能力の低下により、身体近傍空間の特性が変容することが知られています。こうした変化が危険回避能力に与える影響を理解することは、高齢者が安全かつ健康的に生活する上で重要な知見となります。

現在、高齢者を対象とした調査を進めています。特に、加齢による身体近傍空間の変化と、それが日常生活や危険回避能力に及ぼす影響を明らかにすることを目指しています。この研究を通じて、高齢者の生活の質向上に役立つ支援策や環境設計の基盤を築きたいと考えています。今後も努力を重ね、研究を通じて社会に貢献していきたいと思います。

最後に、本研究は寺本渉先生、黒田尚輝さん(熊本大学)との共同研究です。このような榮譽ある賞をいただけたのも、共同研究者および研究協力者の皆さまのおかげです。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

寺岡 諒
(室蘭工業大学大学院 工学研究科 助教)



領域
全体

アウトリーチ活動「公開シンポジウム」開催報告

報告：筒井淳也(B01高年社会参加班 研究代表者／立命館大学)

「生涯学」プロジェクトでは、2021年度より毎年、アウトリーチ活動として公開シンポジウムを実施し、プロジェクト外からゲストスピーカーを招聘して、生涯学に関連するテーマで特別講演を依頼しました。「生涯学」プロジェクトの領域が主に心理学、社会学、文化人類学、教育学によって構成されていることに対応して、第一回目(2021年度)は社会学分野から、第二回目(2022年度)

は心理学分野から、第三回目(2023年度)は人類学分野からゲストスピーカーを招聘してきました。プロジェクト最終年度となる第四回目は、「生涯学」プロジェクトメンバーが、生涯学で得られた知見を還元するという趣旨で、これまでの研究成果を発表しました。

さらに、各回では「生涯学」領域メンバーからも講演者あるいは

はコメンテーターを配置し、一般参加者をまじえて討議を行いました。「生涯学」の領域特性として、異分野の研究者が同一のテーマについて知見を寄せ合うということがあり、公開シンポジウムでもそれぞれの分野の知識を絡み合わせる討議が行われました。

一般参加者には研究職のほか、行政や民間企業などさまざま

な人たちが入っており、また参加人数も多く、プロジェクトについて広く知っていただくという目的を十分に果たしてきたと言えます。以下、これまで4回実施された公開シンポジウムの概要をまとめます。

2021年11月20日(土)

「生涯学」がめざす新しい超高齢社会 ——ヒト・社会・文化をつなぐ 人生100年時代の新しい「カタチ」

特別講演
「人生の選択肢は増やせるのか？ 生涯学への期待」
宮本太郎(中央大学 法学部 教授、北海道大学 名誉教授)

講演
松井三枝(B03臨床心理班 研究代表者／金沢大学)、筒井淳也(B01高年社会参加班 研究代表者／立命館大学)、倉田誠(C02ヒトモノ班 研究代表者／東京医科大学)

オンライン
申込者：427名
当日視聴者：201名
見逃し配信あり



2022年11月5日(土)

「生涯学」の挑戦 ——高次脳機能障害から見える新しい生涯観

特別講演
「ヒトの脳のはたらきは加齢や脳損傷でどう変化するのか」
鈴木匡子(東北大学大学院 医学系研究科 教授)
コメンテーター：倉田誠(C02ヒトモノ班 研究代表者／東京医科大学)、柴田悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者／京都大学)、朴白順(A02生理心理班 研究分担者／京都大学(当時。現弘前大学))

京都大学 芝蘭会館 稲盛ホール ハイブリッド
申込者：511名(対面45名／オンライン466名)
参加者：284名(対面32名／オンライン252名)
見逃し配信あり



2023年11月18日(土)

「生涯学」の展開 ——脱毛から身体と社会の関係性を考える

特別講演
「21世紀の理想の身体
——人類学を使って脱毛が権利になる社会を想像する」
磯野真穂(人類学者)

コメンテーター：日高聡太(A01知覚・認知心理班 研究分担者／上智大学)、安元佐織(公募B03-L101班 研究代表者／大阪大学)、桑原牧子(金城学院大学)

京都大学 国際科学イノベーション棟 ハイブリッド
申込者：293名(対面39名／オンライン254名)
参加者：161名(対面17名／オンライン144名)
見逃し配信あり



2024年11月24日(日)

「生涯学」を知る ——生涯観の刷新に向けた学術知の還元

講演
「生涯にわたる活動がもたらす健康」
滝口雄太(A03臨床心理班 研究員／金沢大学)

「身体活動と脳の健康」
石原 暢(公募A04-L206 研究代表者／神戸大学)

「幸せな生涯を送るには？——余暇・裁量・助け合い」
柴田 悠(B02ウェルビーイング班 研究代表者／京都大学)

「月経の可視化・不可視化
——月経から女性の生涯と社会を考える」
新本万里子(C02ヒトモノ班 研究分担者／広島市立大学)

『「生涯学習」政策のこれまでとこれから」
石井山竜平(D01社会教育班 研究代表者／東北大学)

京都大学 国際科学イノベーション棟 ハイブリッド
申込者：349名(対面64名／オンライン285名)
参加者：175名(対面28名／オンライン147名)
見逃し配信あり



領域
全体

「生涯学」領域会議開催報告

2024年3月15・16日 **現地開催のみ** 報徳会館(小田原城内)
「生涯学」第7回(2023年度第2回)領域会議

2024年8月30・31日 **現地開催のみ** アートホテル弘前シティ
「生涯学」第8回(2024年度第1回)領域会議
※台風のため、短縮プログラムに変更

科学研究費助成事業 学術変革領域研究(A)(2020年度～2024年度)『生涯学の創出——超高齢社会における発達・加齢観の刷新』〔略称「生涯学」〕において、2024年3月および8月に領域会議を開催しました。

3月の開催では、103名が参加し、2日間にわたり研究活動やその成果について議論をかわしました。また領域内交流プログラム「『サクセスフル・エイジング』を見つめなおす」も開催され、権藤恭之先生によるチュートリアル

に続き、多様な視点・論点や社会実装に向けた課題が提示されました。

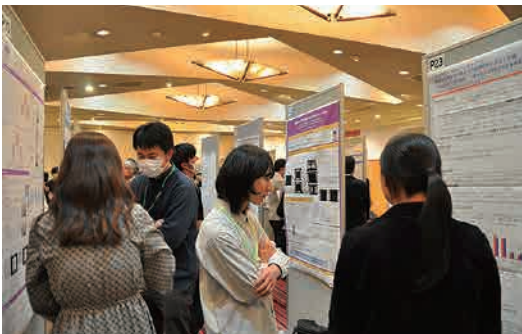
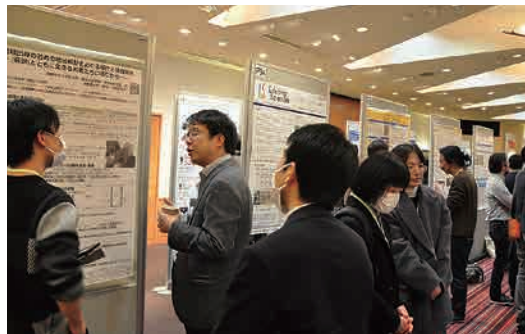
8月の開催は、台風により短縮プログラムに変更、また不可避な欠席もありましたが、66名が参加し、各班が研究成果を口頭発表し学際的議論を交わしました。また若手のポスター発表や、上條信彦先生による講演「学域融合から分かった北東北の縄文文化」と活発な学際的質疑応答も行われました。



第7回(2023年度第2回)領域会議 記念写真



領域内交流プログラム チュートリアル(公募E01-L208班 研究代表者 権藤恭之)



第7回(2023年度第2回)領域会議ポスターセッション

「生涯学」第7回(2023年度第2回)領域会議 プログラム概要

[1日目] 3月15日(金) 【会場】2階「天空」

13:00—13:10	開会挨拶 月浦 崇(領域代表者／京都大学)
口頭発表セッション1 座長：寺本 渉(A01班 研究代表者／熊本大学)	
13:10—13:25	認知機能からこころの健康に取り組む——予防とレジリエンスのために 松井三枝(A03班 研究代表者／金沢大学)
13:25—13:40	異世代間会話——若年成人の認知的負荷を計測する 原田悦子(公募A04-L202班 研究代表者／筑波大学)
13:40—13:55	直感的信頼の高齢者優位性——国や実験課題・分析法を越えた頑健性に関する検討 鈴木敦命(公募A04-L204班 研究代表者／東京大学)
13:55—14:10	生涯にわたる大規模脳構造画像データセットを活用した新たな脳画像解析手法の提案 小池進介(公募A04-L203班 研究代表者／東京大学)
14:10—14:30	休憩

[2日目] 3月16日(土) 【会場】2階「天空」

口頭発表セッション2 座長：柴田 悠	
10:00—10:15	出身家庭に起因する『生涯の不利』を保育は軽減できるか?——1～2歳時保育通園の長期効果 柴田 悠
10:15—10:30	共生社会のレパートリーと高齢社会 笠井賢紀(公募B03-L201班 研究代表者／慶應義塾大学)
10:30—10:45	『復興』計画からの生涯学習政策の検証 石井山竜平
10:45—11:00	『生涯学』と文化人類学的アプローチ——女性土器職人のテクノ・ライフヒストリーを手がかりにして 金子守恵
11:00—11:15	休憩

領域内交流プログラム
『サクセスフル・エイジング』を見つめなおす
座長：筒井淳也(B01班 研究代表者／立命館大学)・日高聡太(A01班 研究分担者／上智大学)

14:30—16:00 ①「サクセスフル・エイジングとは？」
権藤恭之(公募E01-L208班 研究代表者／大阪大学)
②視点・論点提示
計画班：柴田 悠(B02班 研究代表者／京都大学)＋金子守恵(C01班 研究代表者／京都大学)
公募班：原田悦子＋北崎充晃(公募E01-L204班 研究代表者／豊橋技術科学大学)
③社会実装に向けた課題
石井山竜平(D01班 研究代表者／東北大学)
④総合討論

16:00—16:15 領域内共同研究助成の紹介
座長：日高聡太

16:15—16:30 集合写真撮影、ポスター準備

16:30—18:00 ポスターセッション 【会場】2階「琥珀」

口頭発表セッション3
座長：月浦 崇

11:15—11:30 身体的健康と脳の老化の関係
石原 暢(公募A04-L206班 研究代表者／神戸大学)

11:30—11:45 更年期症状の予防・改善を目指したセルフケア支援アプリの開発
江川美保(公募E01-L206班 研究代表者／京都大学)

11:45—12:00 視覚・聴覚障害者のレジリエンスを高める——当事者団体を通じたインフォーマル学習の研究
三浦貴大(公募E01-L210班 研究代表者／産業技術総合研究所)

12:00—13:30 昼食

招待講演 【会場】1階「珠玉」
座長：倉田 誠(C02班 研究代表者／東京医科大学)

13:30—15:00 三度にわたる物語と身体との衝突
熊谷晋一郎(東京大学 先端科学技術研究センター)

「生涯学」第8回(2024年度第1回)領域会議 プログラム概要

【1日目】 8月30日(金) 【会場】3階「エメラルド」

14：00—14：10	開会挨拶 月浦 崇(領域代表者／京都大学)
口頭発表セッション1 座長：柴田 悠(B02班 研究代表者／京都大学)	
14：10—14：25	サイエンス・フィクションが示唆する未来の発達・加齢観の分析 大澤博隆(公募E01-L209班 研究代表者／慶應義塾大学)
14：25—14：40	知覚系の知識獲得機構の加齢変化 寺本 渉(A01班 研究代表者／熊本大学)
14：40—14：55	記憶における加齢と社会性の相互作用の基盤となる脳内機構 月浦 崇(A02班 研究代表者／京都大学)
14：55—15：10	神経発達症における食ライフスタイルと老化 木村 亮(公募A04-L205班 研究代表者／大阪大学)

【2日目】 8月31日(土) 【会場】3階「エメラルド」

口頭発表セッション2 座長：松井三枝(A03班 研究代表者／金沢大学 国際基幹教育院)	
9:30-9:45	認知症高齢者のがんサバイバーシップを支える緩和ケア看護学の創出——地域で暮らす認知症高齢者のがん治療選択と緩和ケアの実態調査 坂井さゆり(公募E01-L201班 研究代表者／新潟大学)
9:45-10:00	老化変容レジレンスの修復による老化新健康概念の創出 近藤祥司(公募E01-L205班 研究代表者／京都大学)
10:00-10:15	認知症治療研究からみる『生涯学』の可能性 坂野晴彦(公募E01-L207班 研究代表者／京都大学 医学部附属病院 先端医療研究開発機構)
10:15-10:30	更年期の母の育児に関する実態調査と脳神経基盤の解明——サポートシステム構築に向けて 石井礼花(公募A04-L207班 研究代表者／国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所)

15：10—15：30	休憩
招待講演 座長：松永篤知(公募E01-L202班 研究代表者／金沢大学資料館)	
15：30—16：30	学域融合から分かった北東北の縄文文化 上條信彦(弘前大学／北日本考古学研究センター)
16：30—16：40	集合写真撮影、ポスター準備
16：40—18：30	ポスターセッション 【会場】3階「サファイア」

10：30—10：35	休憩
口頭発表セッション3 座長：金子守恵(C01班 研究代表者／京都大学 アフリカ地域研究資料センター)	
10:35-10:50	関係を創り出す、関係を組み替える自助具の制作・導入・使用から見た自立と依存 倉田 誠(C02班 研究代表者／東京医科大学)
10:50-11:05	考古学研究者による生涯学のための遺物研究および民俗・民族調査 松永篤知
11:05-11:20	有限的な生の二重化——スペイン・カタルーニャ州の『人間の塔』の継承集団を事例に 岩瀬裕子(公募C03-L201班 研究代表者／東京都立大学)
11:25-11:30	講評 橋本栄莉(文部科学省学術調査官／立教大学)
11:30-11:45	総括班からのお知らせ、閉会挨拶 月浦 崇



第8回(2024年度第1回)領域会議 記念写真



第8回(2024年度第1回)領域会議 招待公演
(上條信彦先生)



成果出版の報告(月浦 崇)



第8回(2024年度第1回)領域会議 ポスターセッション

第8回(2024年度第1回)領域会議参加者の感想

2024年度第1回領域会議を終えて

2024年8月の「生涯学」領域会議に参加させていただきました、武内俊樹と申します。専攻は心理学で、研究では「物語読書」と「共感」を扱っています。読書という行為は一人で行うものですが、物語の読書体験が他者への「共感」(他者感情の認知や共有)に良い影響を与えることが数々の先行研究で示されています。私の研究では、短い物語を読むとその直後に他者への共感の動機づけが高まる、という仮説を立て、そこに個人の特性がどのように関与するかも併せて検討しています。

領域会議では、初めてポスター発表に参加させていただきました。研究者の方が集う中で自分の研究を話すことに緊張していましたが、始まってみると研究に興味を持って話を聞いてくださる温かい方ばかりで、夢中になって話していました。気づけば口の中はカラカラに渴き、他の方のポスターを見にいく時間はほとんど無くなってしまいました……これは大きな反省点です……というのは半ば冗談なのですが、個人的な

学びはいくつもありました。研究の発表方法という観点では、心理学を専門としない方にも研究内容が伝わるよう、情報を取捨選択することの重要性を実感しました。また広く研究へ取り組む姿勢という観点では、自分の研究を一步引いた視点で見ることの大切さに気付かされました。どちらの気付きも、普段の研究室や心理学の学会では得られない、多様な学問分野の方が集まる「生涯学」ならではのものだったと思います。また懇親会では同年代の学生と交流を持つことができ、研究者の方々とも非常に近い距離感でお話することができました。専門外の学問分野の研究に気軽に触れることができる、というのは領域会議の大きな魅力だと感じています。改めて、このような貴重な機会をいただきありがとうございました。次回の会議でも新たな学びを得られることを楽しみにしております。

武内俊樹
(東京大学 人文社会系研究科 修士1年)

東北大学社会教育主事講習への「生涯学」の導入 4年目

報告：石井山竜平(D01社会教育班 研究代表者／東北大学)

エチオピアの土器づくりの 思想に触れた教職員は何を考える

東北大学の社会教育主事講習に「生涯学」の授業を導入して4年目となりました。このたびの主たるアップデートは、過去の3年間においては、本授業を、およそ一か月半の講習期間の後半部分に位置付けていたものを、今年は、講習の初期段階に位置付けたことです。そのため、受講者の皆さんの感想を見ると、従来よりも、自らの生活世界や職業世界に引きつけた感想が多く、かつ、それぞれの学領域からどのような知見が得られるかというこ

とに加えて、講習で今後に取り組む調査研究の方法論的関心が表れている、そうした印象を受けました。

金子守恵先生(C01技能発達班 研究代表者／京都大学アフリカ地域研究資料センター)の講義の感想を確認してみましょう。金子先生の講義では、エチオピア西南部の村の土器職人集団の女性たちについてのトピックが紹介されました。そこでは、土器作りのスキルが代々受け継がれてはいるのだけど、母親たちが娘たちに直接「教える」場面はほぼないとのこと。「なぜ教えないの」と聞くと、「手が違うから、教えられるない」と。すなわち、土器づくりの技術は、口頭で伝えられたり、見ているだけで獲得でき

る技術ではない。手と体にしみついた技術。そしてその手は、一人一人が違う。娘たちは、試行錯誤を重ねながら、数か月かけて、自分なりの土器の作り方を獲得するのだと語られました。以下、その感想の一部です。特に学校教員の方々の、自らの職場文化の枠組みへの気づき、そのつぶやきが印象的でした。

最近の主事講習をめぐる 制度改革(分割履修の容認)をめぐる

ところで、この社会教育主事講習という仕組みは、実は、社会教育を専門とする立場、大学で養成をする立場からは、批判的にとらえる見解が少なからず寄せられてきています。というのも、この資格要件は本来であれば大学の学部4年間を通して修得されるべきとされてきたところを越えてオプションに作られた仕組みでありながら、本講習が実際の社会教育主事任用において主流の養成の道筋になってしまっているからです。たとえば、『月刊社会教育』(旬報社)2024年10月号の長澤成次氏(千葉大学名誉教授)の論稿においても、「1951年法改正から今日まで73年間、国は一貫して公民館主事制度より社会教育主事制度を重視し、大学の養成課程よりも短期養成コースである社会教育主事講習を重視する政策を継続させている」と、その「インスタント」性が批判されています。さらに、この9月に早稲田大学で開催された日本社会教育学会の研究大会(社会教育関連専門職をめぐる国際的動向)においては、主事講習制度に対して「学部養成

という本来の姿を堰き止めている存在なのでは」という趣旨での批判的な意見が寄せられておりました。

一方で、私たち講習実施大学では、実際の受講者の少なからずが次年度には社会教育主事として発令されて現場に就くという、自治体での実際の運用に応えるべく、限られた講習期間内に、実際の仕事に就くその直前の段階で、何をミニマム・エッセンシャルズとして伝えていくのかを吟味し、講習計画を練り直し続けてきたという経緯があります。そうして練られ、凝縮されてきたパッケージは、不十分かもしれないけれども、一定の価値があるものになっているのではと自負しつつも、しかし果たしてこの内容で十分なのかとの逡巡を抱えつつ、毎年の講習を実施しております。

そうした主事講習ですが、社会教育士称号創設を含んだ2018年省令改正、そしてその後の諸改革によって従来の在り方からの変更を余儀なくされつつあります。今年度に表示された改革で、私たちの立場で悩ましいのは、本講習を構成する「生涯学習概論」、「生涯学習支援論」(「生涯学」はこのカテゴリーに位置付けて実施)、「社会教育経営論」、「社会教育演習」のフルパッケージの社会実装ではなく、四つに分けたどれかのパーツのみを開講するということを積極的に認めていくという方針が示されています。おそらく、今後はこうした、パーツを四つかき集めて称号にしていこうという運用が広がるとともに、本講習受講希望者においても、部分履修の受講希望者が増えていくでしょう。

学術を読み解き生活世界に活かす立場に 求められる人間理解を誘うために

おそらくこの方針は、学修時間を切り出すことが困難な社会人の方々が、称号を得られる条件を広げようとする趣旨であり、その意図するところは大事であると私なども思うところです。ただ、おそらくそうした分割的な履修であった場合、以下に一部のみ紹介します、今年の本講習を受講された感想(本講習を通していかなることを学ん

受講生の感想(抜粋)

社会学の授業を受講して

- 始めは、エチオピアの話が出てきてとても驚きました。しかし、日本とは違う環境で女性の活躍がとても印象的でした。年齢を重ねることで、様々な技能を習得し、土地の保有(資産)につながり、大切な存在になっていく。私の祖母を重ねて学習させて頂いていました。
- 「手がちがう」という考えのもと、anzaが自分の学び方で土器づくりを行っていくことが興味深かった。そしてそれが、それぞれ違って当たり前といった多様性を周囲の人々が許容することにつながり、それぞれの良さを生かしている環境がすばらしいと感じた。生き方の根本としては日本もエチオピアも大事な部分は同じだと感じた。
- 人の一生涯の生き様や生き方は文化というものに大きく影響されているということを知るきっかけとなった。
- 女性土器職人の技術の習得過程について、「母は娘に土器づくりを積極的に教えない」「自分で成形できるようになった」という点が特に印象に残りました。私自身が学生の時に学んだ郷土芸能の習得過程に似ている点があるからです。手取り足取り教えずとも、次の世代が自分のものとして身に付けていく「見よう見ま

ね」は、伝統的な技術や技能の伝承に必要な学習方法であると思いました。郷土芸能に親しんだり伝統工芸を制作したりする学習において、児童生徒が地域の方々から「見よう見まね」で学ぶ機会が持てるよう指導過程を工夫したいと思いました。

- 金子先生のお話にあった「手がちがう」は、違うから正しいものに直すべきだ、ではなく、みんなそれぞれ違うがそれで良い、というニュアンスであるように感じました。私ははじめ、前者の意味で捉えてしまっており、これからはエチオピアの方々のような考え方に改めたいと思います。
- 制作した土器の違いを尊重するエチオピアの文化に対して、日本では(基本的には)正確に動きを模倣させるという点で大きな違いがあるように思いましたが、教育現場では実態に応じて柔軟に対応することにも気を付けたいと思います。
- 職場に戻ってからも金子先生の「手がちがう」の考え方は大切になると思うので、自分と異なる意見や方法等があっても、それらを尊重し合えるようにしていきたいです。



だか)とは随分と異なる内容になってしまうのではないかと愚考してしまうのです。

このような受講生の方々の感想に表れているのは、人間についての理解の刷新、もっと言えば、人間が学ぶこと、連帯して行動することの可能性をめぐる理解への刷新であると私は受け止めました。そのことが「人」への関心の高まりにつながっています。そうした人間理解の刷新は、受講者それぞれが、「生涯学」も含めた座学から学びとった内容と、実習で触れた地域で取り組む方々の言葉、その奥にある思想とをつなげ、統合させていく中から導き

出されているように感じております。

称号獲得者を増やすべく、分割履修を進めるべきという考え方からすると、私の構えはいささか保守的すぎるのかもしれませんが、しかし、あえて四つの科目全てを展開し、それを統合させることを企図して講習を組み立ててきた立場から、本講習の意味を改めて問い直し、守るべきと思われることについてはできるだけの保存を講じながら、本講習を守り、発展させていきたいと考えています。こうした思いは、「生涯学」をこの主事講習に導入することで、私自身が獲得し得た確信であり、刷新です。

受講生の感想(抜粋)

- 本講習受講前は、熱い思いを持った誰かが、それを欲している誰かのために、どこかの場所で頑張っている、という、どこか自分とは無関係な、遠い世界の話で、時々メディアを通して目にする程度の考えだったような気がします。今すぐに自分が何か中心となって動くことはないかもしれませんが、講習を通して、地球市民としての意識が芽生えたような気がします。
- 「もっと色々な方の話を聞きたい」「活動に参加してみたい」と思えるようになったのは、自分自身の中では大きな変化であり、講習での学びだったと思います。
- 新たな発見ばかりで、自分の勉強不足を痛感する日々でした。特に、社会教育に携わる人の話を直接聞いたり、活動の様子を見たりすることができたのはとても貴重な経験となりました。どんな思いでそこに住んで、なんのために活動しているのか、そういったリアルな部分に触れることができて大変勉強になりました。
- 情報は自分で探し求めなければ入ってこないことを再確認しました。自分で探して動くからこそ、それに派生してどんどん繋がってたくさんのキーパーソンに出会うことができました。
- データが何を示しているのか、発表されている事は事実なのか、「じぶんの頭で考える」そして、行動に移すことなど、学んだ事は数えきれないほどたくさんあります。
- 学んだことは限りありませんが、その中でも「人の立場、

苦しみに思いを馳せる」ということについて深く考えました。この講習を通して、戦争、震災、公害、障害、引きこもりなど多くの社会課題にふれてきました。そういった課題は、時間の経過とともに歴史に変わっていったしまいがちだけれども、そこには苦しんでいる人がいたこと、今もいること、その課題解決のために多くの人が話し合い尽力してきたこと、そういった人たちの思いを語り継いでいかなければいけないと身にしみて感じました。

●社会教育に関わる法整備についても考えさせられた。講義の中では、社会教育法はもちろん、日本国憲法や教育基本法などの法や指定管理制度などについても学ばせていただいた。初めは、自由な学びの機会である社会教育に法や制度をつなげてしまうと束縛にしかならないのではないかと感じていたが、学びを通して、法や制度があるおかげで守られる人がいることや、やりたいことができるのだということが分かった。

●何が分からないか分からないという自分から、何が分からないかがクリアになっていくのが講習の中で実感できました。そして「知りたい」という欲求が体を走り抜ける感覚を大人になった今、久々に感じています。この欲求こそが、本講習での一番の学びではないかと感じます。

2023-2024年度 活動報告

情報提供期間：2023年12月16日～2024年12月15日

2024年1月25日

学術集会

第2回公開研究会を開催しました 「ものづくりと産地をめぐる研究・座談会」

「国内絹産業のいま——持続可能な産地のあり方を考える」
小澤茉莉(東京工業大学 博士後期課程)
共催：国際ファッション専門職大学共同研究「岩手県のホームスパン産業に関する研究」

2024年2月1日

アウトリーチ

「中高年期の家族生活についての全国調査」を実施しました

調査名：「中高年期の家族生活についての全国調査(NFRJ-S23)」
対象：全国の市区町村に居住する満50～79歳の日本国籍を有する者
実施法：郵送調査
標本サイズ：6,000人(回収数2,764人、回収率46.1%)
実査時期：2024年2月～3月

2024年1月20日・21日

アウトリーチ

若手研究者向けキャリア探求セミナー合宿を開催しました

若手研究者を対象に、「自分を知る」「企業を知る」「分野の枠を超える」をキーワードとした1泊1日の合宿を実施し、7名が参加しました。博士の自己分析ワークショップ、博士のキャリアパスを知る、コラボレーション創出体験ワークショップ、自己分析に基づいた1on1相談会の4つのコンテンツを通して、参加者それぞれが自分の在り方や価値を明確にし、キャリアのスコープを検討しました。参加者間で活発な発言および意見交換が行われ、アンケートでは高い満足度が報告されました。
東京都渋谷区



2024年2月7日 14:00—17:00
8日 10:00—17:00

学術集会

A03 2023年度脳画像検討会を開催しました

安田女子大学齋藤大輔先生をお招きし、2日間にわたって機能的脳画像(fMRI)の基本原理とその解析法についての講義と演習を行いました。
金沢大学 総合教育棟2号館7階 心理行動研究室



2024年4月27日 14:00—17:00

アウトリーチ

一般公開講座「京大知の森」で「生涯学」に関する講演を行いました

14:05—14:55 「生涯学——加齢観の刷新を目指す学際的研究」
月浦崇(領域代表者/A02生理心理班 研究代表者)
15:05—15:55 「老化と対話する医療から新しい健康概念へ」
近藤祥司(公募E01-L205班 研究代表者)
16:05—16:55 パネルディスカッション
主催：京都大学
京都大学 国際科学イノベーション棟5階 シンポジウムホール



2024年3月13日 15:00—16:00

アウトリーチ

B01 PHP総研ブックフォーラム 第6回「少子化対策の現在地と未来」において 小倉將信衆議院議員(前こども政策担当大臣)と対談を行いました

筒井淳也(B01高年社会参加班 研究代表者)
主催：政策シンクタンクPHP総研
オンライン



2024年3月16日・17日

C01 C02	学術集会	文化人類学班連携研究会を開催しました 『『生涯学の創出』成果出版にむけて』
	3月16日 20：00—20：10 20：10—20：30 20：30—20：50 21：10—21：30 21：30—22：00 3月17日 9：30—11：05 9：30—9：45 9：50—10：05 10：10—10：25 10：30—10：45 10：50—11：05 11：05—11：15 11：15—12：00 13：30—15：30 13：30—13：45 13：50—14：05 14：10—14：25 14：40—15：25 15：25—15：30	趣旨説明 金子守恵（C01技能発達班 研究代表者）・倉田誠（C02ヒトモノ班 研究代表者） 「生涯学と人類学的アプローチ——C01班成果集について」 金子守恵 質疑 「生涯学と人類学的アプローチ——C02班成果集について」 倉田誠 質疑 座長：金子守恵 「ケニアの元自転車競技選手に息づく身体技能の浮遊と沈殿——醸成されたわざとつながりの展開」 萩原卓也（C01技能発達班 研究協力者／東洋大学 健康スポーツ科学部） 「大道芸の演者における環境認識に関する世代間比較——視線測定装置を用いた分析と聞き取りを手がかりとして」 相原進（C01技能発達班 研究協力者／京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科） 「バリ島のガムラン音楽における太鼓奏者の演奏技法の獲得と習熟」 鈴木良枝（C01技能発達班 研究協力者／東邦音楽大学） 「インドネシア・バリ島の芸能実践における加齢と身体技法——加齢に抗う／を補う／を受け入れる」 伏木香織（C01技能発達班 研究分担者） 「野生チンパンジーのベッド作成技術にみられる『熟練』」 座馬耕一郎（C01技能発達班 研究分担者） 休憩 ポスターセッション コメント：松本卓也（公募E01-L203班 研究代表者） 座長：倉田誠 「視覚障害とヒトモノ学習理論」 飯嶋秀治（C02ヒトモノ班 研究分担者） 「社会現象としての人間身体——フィジーのろう者の経験にみる身体の構築性」 佐野文哉（C02ヒトモノ班 研究分担者） 「自閉スペクトラム症者とICT」 山本健太（C02ヒトモノ班 研究分担者） 総合討論 閉会の言葉 リゾーピア熱海 会議室

2024年3月15日・16日

領域 全体	学術集会	第7回領域会議（2023年度第2回目）を開催しました →詳細はp.22-25
----------	------	--

2024年4月6日 14：00—16：30

A04-L106	アウトリーチ	「難病を持つ方とその家族を支えるシンポジウム」で講演しました 「ウィリアムズ症候群の現状と展望——日本と英国の研究紹介」 
----------	--------	--

木村亮（公募A04-L205 研究代表者）
東大寺総合文化センター 金鐘ホール

2024年1月4日

B02	アウトリーチ	テレビで研究成果の一部を発信しました NHK Eテレ・NHK 総合 「NHKスペシャル：2024私たちの選択——AI×専門家による“6つの未来”」 少子化についてAI設計協力と解説 柴田悠（B02ウェルビーイング班 研究代表者）
-----	--------	--

2024年2月10日

E01-L203	研究集会	第2回「排泄の自然誌を編む研究会」公開シンポジウムを開催しました 「出すことと出たものへのまなざし」 信州大学 松本キャンパス 理学部C棟 2階大会議室 ハイブリッド
----------	------	--

2024年2月23日

C02	研究集会	第7回研究会を開催しました 九州大学
-----	------	-----------------------

2024年3月27日 12：00—13：00

総括班	アウトリーチ	第4回英語論文の書き方セミナー（2023年度第1回）を開催しました 初めて英語論文を書く、特に文系分野の研究者向けに、カクタスコミュニケーションズのエミリー先生にご講義をいただきました。7名が参加し、論文の各セクションに含むべき内容や使うべき文法時制などの基本的な内容から、ChatGPTや翻訳機能の使用の注意など最新の論文執筆傾向に関わることで幅広く解説していただきました。 （使用言語：英語） オンライン
-----	--------	--



2024年4月9日

B02	アウトリーチ	衆議院「地域活性化・こども政策・デジタル社会形成に関する特別委員会」で 少子化対策について参考人意見陳述を行いました 「これからの少子化対策——『若者の賃上げ』『男性の働き方改革』『育児支援』」 柴田悠（B02ウェルビーイング班 研究代表者）
-----	--------	--

2024年5月8日 17：00—18：00

総括班	アウトリーチ	日本学術振興会特別研究員申請書の 書き方セミナーを開催しました 13名が参加し、日本学術振興会特別研究員についての説明から申請書の項目別の書き方まで、詳しく説明していただきました。申請書の書き方は研究分野が違くと参考になりにくい部分がありますが、多くの若手に共通するアピールポイントなど、分野を超えて参考になるポイントをたくさんお話しいただきました。 1 日本学術振興会特別研究員とは 2 日本学術振興会特別研究員の申請書 3 「研究計画」の書き方 4 「人権の保護及び法令等の遵守への対応」の書き方 5 「研究遂行力の自己分析」の書き方 6 「目指す研究者像等」の書き方 オンライン
-----	--------	---



2024年7月12日

E01-L203	研究集会	第40回日本霊長類学会にてシンポジウムを開催しました 「霊長類の野外調査時の安全管理」（自由集会） トークネットホール仙台 第4会議室（A会場）
----------	------	--

2024年8月6日

C02	研究集会	第8回研究会を開催しました 東京医科歯科大学
-----	------	---------------------------

2024年8月24日

A03

学術集会

2024年度日本認知心理学会神経心理学部会研究会を開催しました
「神経心理学と認知心理学における記憶研究の今」

14：00

開会挨拶
部会長 松井三枝(A03臨床心理班 研究代表者)

14：10—15：00

「生活を支える記憶とウェルビーイングを保つための記憶」
江口洋子(公募E01-L106 研究代表者)

15：10—16：00

「高齢者を対象とした嗅覚と自伝的記憶に関する認知心理学研究」
山本晃輔(法政大学理工学部創生科学科)

16：20—17：10

「記憶障害へのアプローチ——症例と脳機能画像研究から」
鈴木麻希(大阪大学大学院連合小児発達学研究科)

17：10—17：40

全体討論
清水寛之・博野信次(神戸学院大学心理学部)

17：40

閉会挨拶
長谷川千洋(神戸学院大学心理学部)

主催：日本認知心理学会神経心理学部会
共催：学術変革領域研究(A)「生涯学」、神戸学院大学心理学部学術講演会
神戸学院大学 神戸三宮サテライト



2024年8月30日・31日

領域全体

学術集会

第8回領域会議(2024年度第1回目)を開催しました →詳細はp.22-25

2024年9月5日

A04-L108

受賞

日本音響学会で第56回栗屋潔学術奨励賞を受賞しました →詳細はp.26



2024年9月6日

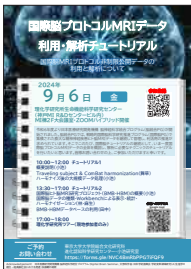
A04-L203

学術集会

国際脳プロトコルMRIデータ利用・解析チュートリアルを開催しました
「国際脳MRIプロトコル非制限公開データの利用と解析について」

令和6年度より開始された、日本医療研究開発機構 脳神経科学統合プログラム(脳統合PG)では、戦略的国際脳科学研究推進プログラム(国際脳PG)で集積された膨大な精神神経疾患ヒト脳MRIデータを継続して管理し、利活用を推進することが求められています。そこで国際脳チュートリアル継続として、国際脳プロトコルMRIデータの全体概説と、解析に必要なテクニックのチュートリアルを行いました。

- 10：00—12：00 チュートリアル1
概要説明 小池進介(公募A04-L203班 研究代表者)
Traveling subject & ComBat harmonization 舞草伯秀(東京大学大学院 総合文化研究科)
ハーモナイズ後の大規模データ処理 小池進介
チュートリアル2
国際脳ヒト脳MRI研究プロジェクト(BMB-HBM)の概要 小池進介
国際脳データの種類・Workbenchによる表示・統計・ハーモナイゼーション
林拓也(理化学研究所)・麻生俊彦(理化学研究所)
BMB-HBMデータベースの利用 田中沙織(奈良先端科学技術大学院大学)
理化学研究所ツアー(現地参加者のみ)
共催：日本医療研究開発機構 脳神経科学統合プログラム Digital Brain Seminar、文部科学省
理化学研究所 生命機能科学研究センター MI棟2F 大会議室
ハイブリッド



2024年11月21日 14：00—18：30

総括班

アウトリーチ

若手研究者の会を開催しました

刻々と変化する就職事情に関する最新情報を講演いただくとともに、講師のユニークなキャリアパスをご紹介いただき、参加者7名は、キャリア選択の動機や意思決定について他者の経験から学ぶことができました。自己PRワークショップでは、グループワークを通してPRをする側と受ける側両方を体験し、伝わるPRについて実践的に学ぶ機会となりました。

- 1 キャリアパス講演
修士・博士課程修了後のキャリアに関する解説と企業就職の例について
- 2 自己PR作成ワークショップ
自身の研究経験を基につつ、研究から培った汎用的能力をPRできるような文書作成について
弘前文化センター



2024年11月24日 14：00—15：30

総括班

アウトリーチ

一般公開シンポジウムを開催しました
「『生涯学』を知る——生涯学の刷新に向けた学術知の還元」

定員：本会場200名(先着順)／オンライン200名
共催：京都大学大学院 人間・環境学研究科、学術越境センター
京都大学 国際科学イノベーション棟5階 シンポジウムホール
ハイブリッド

2024年12月14日

A03

受賞

北陸心理学会で奨励賞を受賞しました
滝口雄太(A03臨床心理班 研究員)



2024年12月15日 10：00—12：00

E01-L208

学術集会

日本認知心理学会高齢者心理部会研究会を開催しました
大阪大学 中之島センター10階 佐治敬三メモリアルホール

2024年12月15日 13：00—16：00

E01-L208

アウトリーチ

一般公開シンポジウムを開催しました
「人生100年時代における心理学の貢献——縦断研究から紐解くこころの加齢発達」

定員：本会場150名／オンライン500名
主催：日本心理学会
共催：日本老年社会学会、大阪大学人間科学研究科未来共創センター、
日本認知心理学会高齢者研究部会
大阪大学 中之島センター10階 佐治敬三メモリアルホール
ハイブリッド



2025年1月8日

E01-L203

研究集会

第3回「排泄の自然誌を編む研究会」公開シンポジウムを開催しました
「循環の中の排泄物」
信州大学松本キャンパス 理学部B棟 大会議室

業績一覧

情報提供期間：2023年12月16日–2024年12月15日

論文

Kuroda, N., Teramoto, W. Expansion of space for visuotactile interaction during visually induced self-motion. 2020. Expansion of space for visuotactile interaction during visually induced self-motion. *Experimental Brain Research* 239:257–265.

原田新也, 寺本渉. 2021. Lab. jsを用いた視聴覚刺激呈示の時間精度と正確性. 基礎心理学研究 40: 175–189.

寺本渉, 小手川耕平. 2021. バーチャルリアリティにおける移動と多感覚情報処理. 理学療法ジャーナル 55 (7): 752–758.

Kotegawa, K.,Teramoto, W. 2021. Association of executive function capacity with gait motor imagery ability and PFC activity: An fNIRS study. *Neuroscience Letters* 766: 136350.

Kuroda, N., Teramoto, W. 2021. Contribution of motor and proprioceptive information to visuotactile interaction in peripersonal space during bike riding. *Experimental Brain Research* 240: 491–501.

小手川耕平, 寺本渉. 2022. 歩行運動イメージの加齢変化——実際運動能力の個人差との関連性. 人文科学論叢 3: 45–59.

Kuroda, N., Ikeda, K., Teramoto, W. 2022. Visual self-motion information contributes to passable width perception during a bike riding situation. *Frontiers in Neuroscience* 16: 938446.

Fujii, Y., Teraoka, R., Kuroda, N., Teramoto, W. 2022. Inhibition of intentional binding by an additional sound presentation. *Experimental Brain Research* 241: 301–311.

小山竜司. 2023. 臨時教育審議会(15)改革理念の具体化への模索①. 月刊公民館 2023年1月号：46–49.

Teraoka, R., Kuroda, N., Teramoto, W. 2023. Interoceptive sensibility is associated with the temporal update of body position perception. *Psychologia* 65: 4–16.

小山竜司. 2023. 臨時教育審議会(16)改革理念の具体化への模索②. 月刊公民館 2023年2月号：43–45.

鈴木敦命. 2022. 顔表情画像による感情喚起——顔表情(対人)認知研究からの視点. 感情心理学研究 29 (2-3): 58–63.

Suzuki, A. 2023. Perception and learning of other people’s trustworthiness: Comparison between older and younger adults. *Psychologia*, 65 (1), 17–34.

小山竜司. 2023. 臨時教育審議会(17)改革理念の具体化への模索③. 月刊公民館 2023年3月号：41–43.

小山竜司. 2023. 臨時教育審議会(18)それぞれのラストスパート. 月刊公民館 2023年4月号：30–33.

近藤祥司. 基礎研究のトピックス セノリシス. 2023. 高齢者糖尿病 update——診断・治療の最新動向 81 (4): 493-499.

内田さえ, 守屋樹羅, 森原大智. 2023. 認知機能に関わる脳内アセチルコリンの働き. 保健の科学 65 (4): 273–278.

黒田尚輝, 藤井芳孝, 寺岡諒, 寺本渉. 2023. 行為部位の運動を制限したときのIntentional binding. 熊本大学社会文化研究 21: 59–69.

小山竜司. 2023. 臨時教育審議会(19)教育改革推進大綱. 月刊公民館 2023年7月号：43–45.

小山竜司. 2023. 臨時教育審議会(20)成案は得られたか. 月刊公民館 2023年8月号：36–39.

江川美保. 2023. 精神症状の強い月経前症候群に対応する秘訣, 産婦人科の進歩 5 (3): 399–400.

小山竜司. 2023. 戦後日本の心象風景(1). 月刊公民館 2023年9

月号：30–34.

春日彩花, 権藤恭之. 2023. 高齢期の幸福感と知恵. 老年精神医学雑誌 34 (9): 835–842.

小山竜司. 2023. 戦後日本の心象風景(2). 月刊公民館 2023年10月号：46–50.

Kondoh, H., Kameda, M. 2023. Metabolites in aging and aging-relevant diseases; frailty, sarcopenia and cognitive decline. *Geriatr Gerontol INTERNATIONAL* Mar: 24 Suppl 1: 44–48.

Mizuno, T., Godai, K., Kabayama, M., Akasaka, H., Kido, M., Isaka, M., Kubo, M., Gondo, Y., Ogawa, M., Ikebe, K., Masui, Y., Arai, Y., Ishizaki, T., Rakugi, H., Kamide, K. 2023. Age Group Differences in the Association Between Sleep Status and Frailty Among Community-Dwelling Older Adults: The SONIC Study. *Archives of Gerontology and Geriatrics* 9: 1–9.

小山竜司. 2023. 戦後日本の心象風景(3). 月刊公民館 2023年11月号：36–39.

小山竜司. 2023. ロック スミス, フリードマン, 松下(1). 月刊公民館 2023年12月号：46–49.

松本卓也. 2023. 霊長類における離乳過程の種間比較——ヒトの「離乳時期の早期化」への洞察 . 霊長類研究 39 (2): 85–96.

岩瀬裕子. 2023. 「基盤的コミュニズム」のゆらぎと調整——スペイン・カタルーニャ州バイスにある「人間の塔」の継承集団を事例に, 社会人類学年報 49: 135–154.

三浦貴大, 大塚勇哉, 出澤由利, 松尾政輝, 大西淳児, 坂尻正次. 2023. 視覚障害がある社会人における学び直しに対する意識——就労環境とリカレント教育・生涯学習講座に関するアンケート調査. 筑波技術大学テクレポート 31: 47–56.

Ishihara, T., Hashimoto, S., Tamba, N., Hyodo, K., Matsuda, T., Takagishi, H. 2024. The links between physical activity and prosocial behavior: an fNIRS hyperscanning study. *Cerebral Cortex* 34 (2): bhad509.

Yoshida, Y., Ishizaki, T., Masui, Y., Hori, N., Inagaki, H., Ito, K., Ogawa, M., Yasumoto, S., Arai, Y., Kamide, K., Ikebe, K., Gondo, Y. 2024. *Geriatrics & Gerontology International* 24: 306–310.

Kawagoe, T., Yoshimura, S., Muranaka, S., Xethakis, L., Onoda, K. 2024. Developing the Japanese and English versions of the Mind Blanking Questionnaire (MBQ): Validation and reliability. *Personality and Individual Differences* 220: 112539.

Kotegawa, K., Kuroda, N., Sakata, J., Teramoto, W. 2024. Association between visuo-spatial working memory and gait motor imagery. *Human Movement Science* 94: 103185.

Teraoka, R., Kuroda, N., Kojima, R., Teramoto, W. 2024. Comparison of peripersonal space in front and rear spaces. *Experimental Brain Research* 242 (1): 797–808.

Cai, L., Maikusa, N., Zhu, Y., Nishida, A., Ando, S., Okada, N., Kasai, K., Nakamura, Y., Koike, S. 2024. Hippocampal structures among Japanese adolescents before and after the COVID-19 pandemic. *JAMA Network Open* 7(2): e2355292 (2024).

Zhu, Y., Maikusa, N., Radua, J., Sämann, P. G., Fusar-Poli, P., Agartz, I., Andreassen, O. A., Bachman, P., Baeza, I., Chen, X., Choi, S., Corcoran, C. M., Ebdrup, B. H., Fortea, A.,

Garani, R. R. G., Glenthøj, B., Glenthøj, L., Haas, S. S., Hamilton, H. K., Hayes, R. A., He, Y., Heekeren, K., Kasai, K., Katagiri, N., Kim, M., Kristensen, T. D., Kwon, J. S., Lawrie, S. M., Lebedeva, I., Lee, J., Loewy, R. L., Mathalon, D. H., McGuire, P., Mizrahi, R., Mizuno, M., Møller, P., Nemoto, T., Nordholm, D., Omelchenko, M. A., Raghava, J. M., Rössberg, J. I., Rössler, W., Salisbury, D. F., Sasabayashi, D., Smigielski, L., Sugranyes, G., Takahashi, T., Tamnes , C. K., Tang, J., Theodoridou, A., Tomyshev, A. A., Uhlhaas, J. P., Værnes, T. G., Van, A. T., Waltz, J., Westlye, L. T., Zhou, J. H., Thompson, P. M., Hernaus, D., Jalbrzikowski, M., Koike, S., the ENIGMA Clinical High Risk for Psychosis Working Group. Using brain structural neuroimaging measures to predict psychosis onset for individuals at clinical high-risk. *Molecular Psychiatry* 2024; 29 (5): 1465–77.

Nakamura, J., Ikei, Y., Kitazaki, M. 2024. Effects of self-avatar cast shadow and foot vibration on telepresence, virtual walking experience, and cybersickness from omnidirectional movie. *i-Perception* 15 (1): 1–22.

池田裕美枝, 江川美保. 2024. 短縮版Daily Records of Severity of Problems(DRSP)8項目の記憶型尺度“Premenstrual Syndrome Short Scale 8 items (PMS-8)”への応用と、妥当性および信頼性の検討, 心身医学 64 (2): 152–160.

Miura, T., Okochi, N., Matsuo, M., Yabu, K., Katagiri, A., Yasu, K., Sakajiri, M., Ifukube, T. 2024. Examining how interaural differences owing to head rotation during walking improve the distance of auditory obstacle perceptions among individuals with visual impairment: A case study in small-scale blind group. *Life* 14 (3): 356.

Yoshino, S., Law, W. H, Koike, S. 2024 Parent-child associations in COVID-19-related preventive behaviors and efficacy expectations: A one-year longitudinal survey. *Journal of Adolescent Health* 74 (6): 1146–1155 (2024).

Uchida, S., Kagitani, F. 2024. Influence of age on nicotinic cholinergic regulation of blood flow in rat’s olfactory bulb and neocortex. *The Journal of Physiological Sciences* 74: 18.

内田さえ. 2024. 視覚・嗅覚器の自律神経制御. 自律神経 61 (1): 57–62.

Li, W., Tsutsui, J., Tanaka, K. 2024. What kind of “outlook of life” do we hold in 100-year-old era: Results from web survey. *Journal of Applied Sociology* 66: 93–106.

松永篤知. 2024. 石川県かほく市余地経塚出土の珠洲焼について. 金沢大学資料館紀要 19: 29–38.

村上一太, 北崎充晃. 2024. バーチャル身体化における変身パターンが身体変容感, 身体所有感, 行為主体感に及ぼす効果. 日本バーチャルリアリティ学会論文誌 29 (1): 39–46.

Kasai, Y. 2024. Discovering the meaning of social groups and events through collaborative research with local communities: Case studies of folklores as repertoires of symbiosis. *The KeMCo Review* 2: 10–28.

澤田知恭, 原田悦子. 2024. 見た目の信頼性に依存した高齢者の推測バイアスの除去——若年成人と行う投資ゲームの効果. 心理学研究 95 (1): 44–50.

Ohsuga, T., Egawa, M., Takahashi, Y., Ikeda, Y., Tsuyuki, K., Kanatani, K., Niwa, F., Hirabayashi, K., Nakayama, T., Mandai, M., The Japan Environment and Children's Study Group. 2024. Association between low MCV in early pregnancy and perinatal mental health in the Japan Environment and Children's Study and the possible effect of iron deficiency. *J Affect Disord* 2024 356: 34–40.

Wang, S., Matsuda, E., Matsuoka, K. 2024. Coronavirus pandemic dreams in China: A qualitative research on the effect of the

Wuhan lockdown on dream contents. *Dreaming* 34 (2): 140–156.

Shi, J., Koike, S. 2024. Human brain magnetic resonance imaging studies for psychiatric disorders: The current progress and future directions. *JMA Journal* 7 (2): 197–204 (2024).

松岡洋子, 渡邊大輔, 中島民恵子, 沼田裕樹. 2024. 介護支援専門員のケアマネジメント実践におけるインフォーマル資源活用に対する態度とその関連要因. 老年社会科学 (1): 20–30.

Hori, N., Ishizaki, T., Masui, Y., Yoshida, Y., Inagaki, H., Ito, K., Ishioka, YL., Nakagawa, T., Ogawa, M., Kabayama, M., Kamide, K., Ikebe, K., Arai, Y., Gondo, Y. 2024. Criterion validity of the health assessment questionnaire for the national screening program for older adults in Japan: The SONIC study. *Geriatrics & Gerontology International* 23 (6): 437–443.

澤岡詩野, 渡邊大輔, 中島民恵子, 大上真一. 2024. 都市高齢者の被援助志向性の関連要因——地域活動への参加とソーシャルサポートネットワークに着目して, 厚生指標 71 (5): 7–13.

Ito, M., Suzuki, A. 2024. Discrepancies in perceived humanness between spatially filtered and unfiltered faces and their associations with uncanny feelings. *Perception* 53 (8): 529–543.

Watanuki, S., Kobayashi, H., Sugiura, Y., Yamamoto, M., Karigane, D., Shiroshita, K., Sorimachi, Y., Morikawa, T., Fujita, S., Shide, K., Haraguchi, M., Tamaki, S., Mikawa, T., Kondoh, H., Nakano, H., Sumiyama, K., Nagamatsu, G., Goda, N., Okamoto, S., Nakamura-Ishizu, A., Shimoda, K., Suematsu, M., Iwama, A., Suda, T., Takubo, K. 2024. SDHAF1 confers metabolic resilience to aging hematopoietic stem cells by promoting mitochondrial ATP production. *Cell Stem Cell* 31 (8): 1145–1161. e15 (2024).

Matsumoto, T. 2024. First noncontact millimeter-wave radar measurement of heart rate in great apes: Validation in chimpanzees (Pan troglodytes). *American Journal of Primatology* 86 (8): e23633.

Miura, T., Fujii, H., Yamazaki, R., Erdenesambuu, D., Matsuo, M., Sakajiri, M., Onishi, J. 2024. Accessible terminal application for visually impaired users utilizing screen readers. *Journal on Technology & Persons with Disabilities* in press.

Katsumi, A., Iwata, S., Tsukiura, T. 2024. Roles of the default mode network in different aspects of self-representation when remembering social autobiographical memories. *Journal of Cognitive Neuroscience* 36 (6): 1021–1036.

Yoshida, Y., Ishizaki, T., Masui, Y., Miura, Y., Matsumoto, K., Nakagawa, T., Inagaki, H., Ito, K., Arai, Y., Kabayama, M., Kamide, K., Rakugi, H., Ikebe, K., Gondo, Y. 2023. Effects of multimorbidity and polypharmacy on physical function in community-dwelling older adults: a 3-year prospective cohort study from the SONIC. *Archives of Gerontology and Geriatrics* 126: 105521.

Matsui, M., Matsuoka, T., Suzuki, M. 2024. Application of the Japanese verbal learning test to patients with Alzheimer’s disease in the early stage. *Cureus Journal of Medical Science* 16 (6): e62258.

Ohata, Y., Godai, K., Kabayama, M., Kido, M., Akagi, Y., Tseng, W., Maus, M., Akasaka, H., Takami, Y., Yamamoto, K., Gondo, Y., Yasumoto, S., Ogawa, M., Kasuga, A., Matsumoto, K., Masui, Y., Ikebe, K., Arai, Y., Ishizaki, T., Kamide, K. 2024. Risk factors predicting subtypes of physical frailty incidence stratified by musculoskeletal diseases in community-dwelling older adults: The SONIC study. *Geriatrics & Gerontology International* 24 (8): 797–805.

増田柚衣, 月浦崇. 2024. 作話の基盤となる出来事の時間的文脈の処理とリアリティモニタリングに関する神経メカニズム. 脳神経内科 100 (6): 572–577.

Kikutani, M., Takiguchi, Y., Ebina, K., Matsui, M. 2024. The relationship between script memory for everyday events and schizotypy: An investigation through a development of Japanese Situational Feature Recognition Test. *Frontiers in Psychiatry* 15: 1345789.

Mitani, H., Kondo, N., Amemiya, A., Tabuchi, T. 2024. Promotive and protective effects of community-related positive childhood experiences on adult health outcomes in the context of adverse childhood experiences: A nationwide cross-sectional survey in Japan. *BMJ Open* 2024;14: e082134.

Matsuda, E., Kikutani, M. 2024. Impacts of sleep disturbance and work-related life stress on depression among Japanese and Chinese workers. *PLoS ONE* 19 (6): e0305936.

月浦崇. 2024. 認知予備力からみる超高齢社会における新しい生涯観. 高次脳機能研究 44 (2): 132–136.

松井三枝. 2024. 認知予備力の概念とその臨床的理解. 高次脳機能研究 44 (2): 137–141.

大須賀拓真, 露木香, 江川美保. 2024. 婦人科良性疾患に伴う貧血の管理法, 臨床婦人科産科 78 (7): 618–623.

日高聡太, 川越敏和, 浅井暢子, 寺本渉. 2024. 高齢者の日常生活における感覚の困りごとに関する検討——中年者群を含めた検討. 心理学研究 95 (3): 164–173.

Mikawa, T., Yoshida, K., Kondoh, H. 2024. Senotherapy preserves resilience in aging. *Geriatr Gerontol INTERNATIONAL* 24 (9): 845–849.

Nakamura, J., Kitazaki, M. 2024. The effect of posture on virtual walking experience using foot vibrations. *Scientific Reports* 14, 19366: 1–12.

澤田知恭, 原田悦子. 2024. 追唱課題における加齢と訓練の効果——言語的マルチタスクとしての検討. 筑波大学心理学研究 63: 21–30.

Suzuki, A., Osanai, H., Liu, C. H. 2024. Cross-cultural investigation into the associations of fiction reading habits with mentalizing skills and stereotyping among adults in the United Kingdom and Japan. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts* in press.

Yasumoto, S., Ito, D., Toyoshima, A., Kimura., Y. 2024. To what age do Japanese people wish to live? The impact of age stereotypes. *The International Journal of Aging and Human*

Development 100 (1): 41–55.

Masui, Y., Nakagawa, T., Yasumoto, S., Ogawa, M., Ishioka, Y., Kasuga, A., Hori, N., Inagaki, H., Yoshida, Y., Ito, K., Takayama, M., Arai, Y., Ikebe, K., Kamide, K., Ishizaki ,T. & Gondo, Y. 2024. Development in gerotranscendence in community-dwelling older adults in Japan: A longitudinal study over a nine-year period. *Journal of Adult Development* in press.

松永篤知. 2024. タイ北部に暮らすラフ・シェレ族の編物食卓の製作記録——民族考古学的参考情報として. 金沢大学考古学紀要 45: 19–26.

Muhl, C., Mulligan, K., Giurca, C. B., Polley, M. J., Bloch, G., Nowak, A. D., Osborn-Forde, C., Hsiung, S., Lee, H. K., Herrmann, W. J., Baker, R. J., Stokes-Lampard, D. H. J., Everington, S. S., Dixon, M., Wachsmuth, I., Figueiredo, C., Skjerning, T. H., Rojatz, D., Chen, Y-D., Heijnders, L. M., Wallace, C., Howarth, M., Watanabe, D., Bertotti, M., Jansson, H. A., Althini, S., Holzinger, F., Glyn Dooler, G. D., Brand, S., Anfilogoff, J. T., Fancourt, D., Nelson, M. L. A., Tierney, S., Leitch, A., Nam, A-K., Card, G. K., Hayes, D., Slade, S., Essam, A. M., Palmer, A. G., Welch, A. V., Robinson, D., Hilsgen, L., Taylor, N., Nielsen, Ø. R., Vidovic, D., McDaid, M. E., Hoffmeister, V. L., Bonehill, J., Siegel, A., Bártová, A., Acurio-Páez, D., Mendive, M. J., Husk, K. 2024. Building common understanding: seeking consensus and defining social prescribing across contexts: a collective commentary on a Delphi study. *BMC Health Services Research* 24: 1280 (2024).

李雯雯. 2024. 育児負担感に対する祖父母育児支援の緩和機能——性別と実義親による違い. 家族社会学研究 36 (2): 139–150.

Ohsuga, T., Egawa, M*, Tsuyuki, K., Ueda, A., Komatsu, M., Chigusa, Y., 2024. Association of premenstrual disorders during preconception with perinatal depression: an analysis of the perinatal clinical database of a single Japanese institution. *BioPsychoSocial Medicine* in press.

露木香, 大須賀拓真, 江川美保. 2024. 【症候からの鑑別診断】帯下異常. 産婦人科の実際増刊号 73 (11): 1156–1160.

奥宮太郎, 坂野晴彦, 井上治久. 2024. iPS細胞による脳神経疾患のドラッグリポジショニング. 月刊「細胞」56 (13) in press.

近藤祥司, 三河拓己, 亀田雅博. 2024. 生体レジリエンスの老化変容とセノセラピーによるその修復. 実験医学 42 (20) in press.

筒井淳也. 2023. 「コロナ・パンデミックとジェンダー格差」. 遠藤薫, 山田真茂留, 有田伸, 筒井淳也(編). 『災禍の時代の社会学——コロナ・パンデミックと民主主義』. 東京大学出版会, pp. 19–34.

筒井淳也, 北田暁大. 2023. 「変化する社会と向き合う社会学」. 筒井淳也, 北田暁大(編). 『岩波講座社会学 理論・方法』. 岩波書店, pp. 283–300.

上田晃, 内田さえ, 鍵谷方子, 原田彰宏. 2023. 『人体の構造と機能 第6版』. 医歯薬出版.

菊澤佐江子. 2023. 「家族と健康」. 日本家族社会学会(編). 『家族社会学事典』. 丸善出版, pp. 530–531.

田中慶子. 2023. 「パラサイト・シングル(親同居シングル)」. 日本家族社会学会(編). 『家族社会学事典』. 丸善出版, pp. 420–421.

松井三枝. 2024. 「心理検査」. 尾崎紀夫, 三村將(監修). 水野雅文, 村井俊哉, 明智龍男(編). 『標準精神医学 第9版』. 医学書院, pp. 129–143.

安井真奈美(編). 2024. 『「浮世絵にみる妊産婦と胎児の身体イメージ展」図録(日・中・英)』. 国際日本文化研究センター.

内田さえ. 2024. 「脳血流に及ぼす作用」. 矢野忠(編). 『図解鍼灸療法技術ガイド I 第2版』. 文光堂, pp. 170–175.

月浦崇. 2024. 第15章「神経心理学の研究と倫理」. 緑川晶, 山口加代子, 三村將(編). 『公認心理師カリキュラム準拠 臨床神経心理学【神経・生理心理学】第2版』. 医歯薬出版, pp. 206–216.

内田さえ. 2024. 「自律神経系の理解」. 緑川晶, 山口加代子, 三村將(編). 『公認心理師カリキュラム準拠 臨床神経心理学【神経・生理心理学】第2版』. 医歯薬出版, pp. 206–216.

風間計博, 丹羽典生(編). 2024. 『記憶と歴史の人類学——東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験』. 風響社.

松井三枝. 2024. コラム「統合失調症の人の心理」. 上田幸彦, 久保義郎, 山口加代子(編). 『最新リハビリテーション基礎講座

● 国際学会

Konya, A. Stonescapes: The Concept of Time and Space in the Myth of Palau, Vā Moana: Space and Relationality in Pacific Thought and Identity, 24–25 November 2021(Online).

Teramoto, W., Ernst, M. O. Modulation of phonetic perception by invisible lip movements, International Multisensory Research Forum, Ulm, Germany, 4–7 July 2022.

Konya, A. Palauan Beads and Money: When a False Coin Appeared, 2023 CSI Annual Meeting “The Sense of Place under the Era of Globalization”, Taichung, Taiwan, 2–3 June 2023.

Kasuga, A., Yasumoto, S., Nakagawa, T., Ishioka, Y., Kikuchi, A., Inagaki, H., Ogawa, M., Hori, N., Masui, Y., Choe, H., Muto, H., Kabayama, M., Godai, K., Ikebe, K., Kamide, K., Ishizaki, T., Gondo, Y. Older adults’ social interaction changes during the COVID-19 pandemic, IAGG Asia/Oceania Regional Congress, Yokohama, Japan, 12–14 June 2023.

Mizuno, T., Godai, K., Kabayama, M., Gondo, Y., Ogawa, M., Masui, Y., Arai, Y., Ishizaki, T., Rakugi, H., Kamide, K. Longitudinal association of sleep duration and sleep quality with frailty among the community dwelling Japanese older adults in the 70s: the SONIC study, IAGG Asia/Oceania Regional Congress, Yokohama, Japan, 12–14 June 2023.

Moriya, J., Morihara,D., Kagitani, F., Uchida, S. Basic research on cholinergic function that links olfaction and dementia: Effect of basal forebrain stimulation on extracellular acetylcholine release in the olfactory cortex., IAGG Asia/Oceania Regional Congress, Yokohama, Japan, 12–14 June 2023.

Moriyara, D., Moriya, J., Kagitani, F., Uchida, S. Basic research on cholinergic function that links olfaction and dementia: Analysis of blood flow responses in the olfactory bulb and neocortex to trigeminal olfactory stimulation, IAGG Asia/Oceania Regional Congress, Yokohama, Japan, 12–14 June 2023.

Uchida, S., Moriya, J., Morihara,D., Kagitani, F. Aging changes of alpha4beta2 nicotinic receptor function in the olfactory bulb, IAGG Asia/Oceania Regional Congress, Yokohama, Japan, 12–14 June 2023.

Yoshida, Y., Ishizaki, T., Masui, Y., Hori, N., Inagaki, H., Ito, K., Ogawa, M., Yasumoto, S., Arai, Y., Kamide, K., Ikebe, K., Gondo, Y. The effect of the number of medications on the incidence of falls among community-dwelling older adults: Three-year longitudinal analysis of the SONIC study, IAGG Asia/Oceania Regional Congress, Yokohama, Japan, 12–14

臨床心理学』. 医歯薬出版.

松田英子(監修). 2024. 『夢の鍵 あなたの未来を思い通りに』. 飛鳥新社.

権藤恭之. 2024. 『100歳は世界をどう見ているのか』. ポプラ新書.

田中慶子. 2024. 「成人後の親子関係」. 木戸功, 松木洋人, 戸江哲理(編). 『家族社会学事典』. 丸善出版, pp. 530–531.

渡邊大輔, 前田一步. 2024. 「耐久消費財の普及は妻の家事時間を減らしたのか」. 相澤真一, 渡邊大輔, 石島健太郎, 佐藤香(編). 『戦後日本の貧困と社会保障——社会調査データの復元からみる家族』. 東京大学出版会, pp. 203–219.

渡邊大輔. 2024. 「戦後日本型労働・雇用——保障体制の手前における高齢者の働き方と子からの自立生活意識」. 相澤真一, 渡邊大輔, 石島健太郎, 佐藤香(編). 『戦後日本の貧困と社会保障——社会調査データの復元からみる家族』. 東京大学出版会, pp. 263–280.

June 2023.

Sawada, T., Harada. E. T. Associations between memory and cognitive resources during conversation, SARMAC XIV 2023, Nagoya, Japan, 9–12 August 2023.

Tsuchihashi, A., Takenaka, M., Hayashi, K., Yamada, G., Ogura, T., Ito, M., Isokado, S., Nagahara, E., Tojo, K., Matsumoto,T. Behavioral study of fish hunting in three groups of Japanese macaques (Macaca fuscata) from Kamikochi based on the individual identification method: Analysis of sex differences, age differences, and behavioral variation in fish hunting, International Primatological Society - Malaysian Primatological Society (IPS-MPS) Joint Meeting, Kuching, Malaysia, 19–25 August 2023.

Zhou, Y., Matsui, M., Ebina, K., Takiguchi, Y., Kinoshita, M., Nakada, M. Correlation between physical leisure activities and functional connectivity of brain networks in healthy people, 52nd annual meeting of International Neuropsychological Society, New York, USA, 14–17 February 2024.

Harada, N., Kitazaki, M., Tasaki, R. Robotic VR massage system: Physical care robot with out-of-body experience in virtual karesansui, The 31st IEEE Conference on Virtual Reality and 3D User Interfaces (IEEE VR), Orlando, USA, 16–21 March 2024.

Nakamura, J., Kitazaki, M. Enhancing virtual walking in lying position: Upright perception by changing self-avatar’s posture, The 31st IEEE Conference on Virtual Reality and 3D User Interfaces (IEEE VR), Orlando, USA, 16–21 March 2024.

Kamo, A., Mihara, M., Tsukiura, T. Roles of the social brain network and emotion network in memory for other persons with trustworthy impressions generated from social interaction, Society for Social Neuroscience 2024 Meeting, Tsukuba, Japan, 25–28 March 2024.

Kurihara, D., Nishioka, T., Mihara, M., Iwata, S., Park, P., Tsukiura, T. Neural mechanisms underlying memories for others whose impressions of trustworthiness were updated, Society for Social Neuroscience 2024 Meeting, Tsukuba, Japan, 25–28 March 2024.

Mihara, M., Kamo, A., Tsukiura, T. Neural mechanisms underlying the effect of prediction errors in facial attractiveness between masked and unmasked faces on face memories in young and older adults, Society for Social Neuroscience 2024 Meeting, Tsukuba, Japan, 25–28 March 2024.

● 図書

安井真奈美. 2021. 「願いを絵に託す——近現代の小絵馬」. 安井真奈美, エルナンデス・アルバロ(編). 『身体の大衆文化——書く・着る・歌う』. KADOKAWA, pp. 213–246.

筒井淳也. 2022. 『社会学』. 岩波書店.

安井真奈美. 2022. 「妊婦と胎児の身体を可視化する——明治時代初期の錦絵を中心に」. 安井真奈美, ローレンス・マルソー(編). 『想像する身体 上巻——身体イメージの変容』. 臨川書店, pp. 98–123.

安井真奈美(編). 2022. 『想像する身体 下巻——身体の未来へ』. 臨川書店.

坂野晴彦, 奥宮太郎, 井上治久. 2023. 認知症の治療 第5章 Topics「iPS細胞による抗認知症薬の開発」. 池田学, 神庭重信, 松下正明(編). 『神経認知障害群 第5巻 講座精神疾患の臨床5』. 中山書店, pp. 386–391.

松本卓也. 2023. 「障害個体の行動および他個体とのやりとり」. 日本霊長類学会(編). 『霊長類学の百科事典＝The encyclopedia of primatology』. 丸善出版, pp. 412–413.

Ohkubo, K., Masuda, Y., Mihara, M., Kamo, A., Teramoto, W., Tsukiura, T. Roles of the default mode network modulated by levels of the sense of agency during future thinking and autobiographical memory retrieval, Society for Social Neuroscience 2024 Meeting, Tsukuba, Japan, 25–28 March 2024.

Kitazaki, M., Onodera, R., Kataoka, J., Inoue, Y., Iwasaki, Y., Ganesh, G. Owl-vision: Augmentation of visual field by virtual amplification of head rotatio, Augmented Humans 2024, Melbourne, Australia, 4–6 April 2024.

Ebina, K., Matsui, M., Kinoshita, M., Saito, D., Takiguchi, Y., Nakada, M. The moderator for the disconnection of white matter tract on postoperative cognitive function in patients with brain tumors, 31st Annual Meeting of Cognitive Neuroscience Society, Tronto, Canada, 13–16 April 2024.

Morihara, D., Moriya, J., Kagitani, F., Uchida, S. Nicotinic cholinergic modulation of regional blood flow responses in the olfactory bult and neocortex to trigeminal olfactory stimulation, FENS (Federation of European Neuroscience Societies) Forum 2024, Vienna, Austria, 25–29 June 2024.

Uchida, S., Moriya, J., Morihara,D., Kagitani, F. The basal forebrain cholinergic system linking olfaction and cognitive function: from basic studies to clinical application, FENS (Federation of European Neuroscience Societies) Forum 2024, Vienna, Austria, 25–29 June 2024.

Masuda, Y., Park, P., Ueno, S., Takahashi, K., Ueda, K., Murai, T., Tsukiura, T. Promotion and inhibition of associative inference by semantic relationship between memory items in patients with diffuse axonal injury, International Neuropsychological Society 2024 Mid-Year Meeting, Porto, Portugal, 3–5 July 2024.

Matsuo, M., Kitamura, N., Egashira, M., Hosogai, T., Hatakeyama, S., Kato, D., Hayakawa, K., Onishi, J., Sakajiri, M., Miura, T. Inclusive fighting with mind’s eye: Case study of a fighting game playing with only auditory cues for sighted and blind gamers, International Conference on Computers Helping People with Special Needs (ICCHP 2024), Linz, Austria, 8–12 July 2024.

Uchida, S., Moriya, J., Morihara, D., Kagitani, F. The basal forebrain cholinergic system linking olfaction and cognitive

function: from basic studies to clinical application, 13th Congress of The International Society for Autonomic Neuroscience (ISAN), Birmingham, UK, 25–27 July 2024.

Teramoto, W. Age-related changes in automatic audiovisual speech processing in the McGurk effect, 46th European Conference on Visual Perception 2024 (ECVP46), Aberdeen, UK, 25–29 August 2024.

Toriumi, S., Katsumata, Y., Inoue, Y., Hapuarachchi, H., Kitazaki, M. Sense of embodiment and motor performance of the co-embodiment hands in a virtual environment, 46th European Conference on Visual Perception 2024 (ECVP46), Aberdeen, UK, 25–29 August 2024.

Nakayama, M., Uchida, Y. Decoding Daily Well-Being in Japan, 2024 APS Global Psychological Science Summit, 23–24 October 2024 (Online).

Kakuta, M., Gondo, Y., Nakagawa, T., Masui, Y., Kamide, K., Ikebe, K., Ishizaki, T., Arai Y. Relationship Between Personality Traits and Preferences for Coping Styles in Older Adults, Gerontological Society of America 2024 annual scientific meeting, Seattle, USA, 13–16 November 2024.

Wang, C., Gondo, Y., Nakagawa, T., Masui, Y., Kamide, K., Yasumoto, S., Ogawa, M., Kasuga, A. Comparison of Health Outcomes Among Two Septuagenarian Cohorts a Decade Apart in Japan Introduction, Gerontological Society of America 2024 annual scientific meeting, Seattle, USA, 13–16 November 2024.

Yasumoto, S. Conflictive Images of Aging in Japan: Why Don't Japanese People Wish to Live to 100?, Gerontological Society of America 2024 annual scientific meeting, Seattle, USA, 13–16 November 2024.

Hapuarachchi, H., Ranjan, R., Nakamura, J., Kitazaki, M., Kim, J. SkiWalkerVR: Towards naturalistic virtual walking using hand movements and foot vibrations, SIGGRAPH Asia 2024 Emergent Technologies (E-tech), Tokyo, Japan, 3–6 December 2024.

Nakamura, J., Kitazaki, M. Wireless vibrant virtual walker: Wireless foot vibration device for virtual walking experience, SIGGRAPH Asia 2024 Extended Reality (XR), Tokyo, Japan, 3–6 December 2024.

俗学会第73回年会，2021年10月10日(オンライン)。

黒田尚輝，成瀬香織，寺本渉，身体の行動制限が身体近傍空間表象に与える影響，第41回VR心理学研究委員会，2022年2月27日–28日(オンライン)。

寺岡諒，黒田尚輝，寺本渉，加齢が身体位置知覚の時間特性に及ぼす影響——内受容感覚精度の観点から，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，2022年2月27日–28日(オンライン)。

藤井芳孝，寺岡諒，黒田尚輝，原田新也，寺本渉，手足の行為によるintentional bindingの加齢変化，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，2022年2月27日–28日(オンライン)。

筒井淳也，コロナ・パンデミックと職業・ジェンダー，第95回日本社会学会大会，茨木，2022年11月12日–13日。

黒田尚輝，寺岡諒，原田新也，寺本渉，加齢が通過可能幅知覚に及ぼす影響——重心動揺との関連性，日本基礎心理学会第41回大会，千葉，2022年12月2日–4日。

黒田尚輝，寺岡諒，原田新也，寺本渉，身体の行動制限時の身体近傍空間，第13回多感覚研究会，大阪，2023年2月18日。

寺岡諒，小嶋琳佳，黒田尚輝，寺本渉，聴覚接近刺激の到来方向が身体近傍空間に与える影響，第13回多感覚研究会，大阪，2023年2月18日。

原田新也，寺岡諒，黒田尚輝，日高聡太，寺本渉，非空間的な聴覚刺激呈示が高齢者の視覚探索に与える影響，第13回多感覚研究会，大阪，2023年2月18日。

藤井芳孝，寺岡諒，黒田尚輝，寺本渉，2つの行為随伴刺激によるIntentional Bindingの抑制と視聴覚間の相互作用，第13回多感覚研究会，大阪，2023年2月18日。

黒田尚樹，原田新也，寺岡諒，寺本渉，胸部の身体近傍空間様相の加齢変化，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，富山，2023年2月22日–23日。

児玉直樹，寺岡諒，黒田尚輝，寺本渉，錯覚生起動作の能動性が身体位置知覚の時間特性に与える影響，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，富山，2023年2月22日–23日。

双須藍里，黒田尚輝，原田新也，寺岡諒，寺本渉，他者の歩容がパーソナルスペースに与える影響，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，富山，2023年2月22日–23日。

竹尾香濃，黒田尚輝，寺本渉，手の身体近傍空間の時間特性，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，富山，2023年2月22日–23日。

田中優希，寺岡諒，寺本渉，距離方向に対する聴覚の注意が標的音聴取に及ぼす影響，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，富山，2023年2月22日–23日。

松本卓也，山岳地域における霊長類研究の進捗と展望，信州大学山岳科学研究拠点令和5年度実施報告会，松本，2023年3月4日。

長原衣麻，竹中將起，土橋彩加，林浩介，東城幸治，松本卓也，厳冬期の上高地におけるニホンザルの水生生物食——分子マーカーによる糞分析，日本生態学会第71回全国大会，横浜，2023年3月16日–21日。

内田さえ，守屋樹羅，森原大智，志村まゆら，鍵谷方子，大脳新皮質血流のニコチン性コリン作動性調節，第46回日本基礎老化学会大会，横浜，2023年6月16日–18日。

土橋彩加，竹中將起，林浩介，山田玄城，小倉孝之，伊藤百音，磯角翔平，長原衣麻，東城幸治，松本卓也，ニホンザルの上高地集団における魚捕り行動の行動生態学的特徴，第39回日本霊長類学会大会，神戸，2023年7月7日–8日。

Uchida, S., Moriya, J., Morihara, D., Kagitani, F. The influence of age on nicotinic cholinergic regulation of blood flow responses in the olfactory bulb and neocortex，第46回日本神経科学大会，仙台，2023年8月1日–4日。

澤田知恭，原田悦子，会話中に発話が計画されるタイミングの検討——年齢群間比較，日本認知科学会第40回大会，函館，2023年9月7日–9日。

寺本渉，音声知覚における見えない視覚情報の影響の加齢変化，日本心理学会第87回大会，神戸，2023年9月15日–17日。

田中慶子，親子の情緒関係の世代間連鎖——3世代調査の分析(3)，第96回日本社会学会大会，東京，2023年10月8日–9日。

内田さえ，守屋樹羅，森原大智，鍵谷方子，嗅球のニコチン受容体機能の老化，第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023年10月28日–29日。

守屋樹羅，森原大智，鍵谷方子，内田さえ，梨状皮質の血流に対する前脳基底部刺激の影響，第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023年10月28日–29日。

筒井淳也，処置のジレンマ——因果推論における意味の問題，第96回日本社会学会大会，東京，2023年10月8日–9日。

守屋樹羅，森原大智，鍵谷方子，内田さえ，三叉神経系嗅覚刺激による脳血流反応の解析，第76回日本自律神経学会総会，さいたま，2023年10月28日–29日。

藤井芳孝，黒田尚輝，寺岡諒，原田新也，寺本渉，高齢者のTemporal bindingと行為部位の影響，第14回多感覚研究会，吉賀，2023年11月3日–5日。

寺本渉，視聴覚音声知覚における自動的処理の加齢変化，第14回多感覚研究会，吉賀，2023年11月3日–5日。

森原大智，守屋樹羅，鍵谷方子，内田さえ，三叉神経系嗅覚刺激による脳血流反応の解析，日本情動学会第12回大会，京都，2023年11月18日–19日。

寺岡諒，黒田尚輝，寺本渉，胸部の身体近傍空間表象の方位依存性，日本基礎心理学会第42回大会，豊橋，2023年12月1日–2日。

森原大智，守屋樹羅，鍵谷方子，内田さえ，三叉神経を介する嗅覚刺激が脳局所血流に及ぼす影響，第50回自律神経生理研究会，東京，2023年12月2日。

坂野晴彦，奥宮太郎，網野祥子，堀尾綾香，永井洋士，井上治久，医師主導治験調整事務局における業務分析，第44回日本臨床薬理学会学術総会，神戸，2023年12月14日–16日。

増田柚衣，朴白順，植野仙経，高橋賢人，上田敬太，村井俊哉，月浦崇，外傷性脳損傷患者2例を対象とした連合推論の検討，第35回東北神経心理懇話会，仙台，2024年1月27日。

黒田尚輝，原田新也，寺本渉，視覚的自己運動情報が高齢者の身体近傍空間表象に与える影響，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，沖縄，2024年2月22日–23日。

原田新也，寺岡諒，黒田尚輝，寺本渉，運動知覚における視聴覚統合の加齢変化，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，沖縄，2024年2月22日–23日。

江川美保，プレコンセプションケアとしての月経トラブル対策，第33回滋賀県母性衛生学会学術集会，長浜，2024年2月23日。

伊藤資浩，鈴木敦命，空間周波数帯域間での人間らしさの知覚の不一致は不気味さを喚起するか，「注意と認知」研究会 第21回研究会，名古屋，2024年3月3日–5日。

寺岡諒，黒田尚輝，寺本渉，胸聴覚による身体近傍空間の方位依存性の検討，日本音響学会2024年春季研究発表会，東京，2024年3月6日–8日。

藤井芳孝，黒田尚輝，寺岡諒，原田新也，寺本渉，Temporal bindingの加齢変化と行為部位の影響，知覚コロキウム，愛媛，2024年3月25日–27日。

Morihara, D., Moriya, J., Kagitani, F., Uchida, S. Regional cerebral blood flow responses to trigeminal olfactory stimulation，第101回日本生理学会大会，北九州，2024年3月28日–30日。

Moriya, J., Morihara, D., Kagitani, F., Uchida, S. Effect of basal forebrain stimulation on regional blood flow in the piriform cortex，第101回日本生理学会大会，北九州，2024年3月28日–30日。

Ohsuga T., Egawa, M., Tsuyuki, K., Ueda, A., Komatsu, M., Chigusa, Y., Mogami, H., Mandai, M. The association between PMS/PMDD before pregnancy and perinatal depression: an analysis of the Kyoto University Hospital Obstetric Database, 第76回日本産科婦人科学会学術講演会，横浜，2024年4月19日–21日。

露木香，大須賀拓真，池田裕美枝，江川美保，万代昌紀，日本語版のPMS/PMDD尺度の検討，第76回日本産科婦人科学会学術講演会，横浜，2024年4月19日–21日。

丹羽朋子，手仕事・風土・素材を再編する思想と実践——日本と中国における実験的プロジェクトから，民族藝術学会第40回大会シンポジウム『『民藝』の現在と“arts/”』，西宮，2024年4月20日。

松永篤知，弥生時代以降の稲ワラ製編物について考える——考古・民俗・民族を中心に，日本考古学協会第90回総会，千葉，2024年5月25日–26日(ハイブリッド)。

Banno, H., Okunomiya, T., Kondo, T., Amino, Y., Nakakura, A., Tada, H., Morita, S., Shindo, A., Maki, T., Ikeda, M., Izumi,

● 国内学会

黒田尚輝，寺本渉，筋肉量が身体近傍空間で生じる視触覚相互作用に与える影響，日本基礎心理学会第39回大会，2020年11月7日–17日(オンライン)。

寺岡諒，黒田尚輝，寺本渉，身体位置知覚における視覚情報の影響の時間特性，第37回VR心理学研究委員会，2020年11月27日–28日(オンライン)。

藤井芳孝，寺岡 諒，黒田尚輝，寺本渉，2つの行為随伴刺激がIntentional Bindingに与える影響，第37回VR心理学研究委員会，2020年11月27日–28日(オンライン)。

藤井芳孝，寺岡諒，黒田尚輝，寺本渉，2つの行為随伴刺激によるIntentional Bindingの抑制とその時間特性，日本視覚学会 2021年冬季大会，2021年1月20日–22日(オンライン)。

黒田尚輝，池田一裕，寺本渉，VR環境下での自転車走行時の通過可能幅知覚，電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会(HIP)，2021年2月18日–19日(オンライン)。

寺岡諒，黒田尚輝，寺本渉，身体位置知覚における視覚——自己受容感覚の統合と内受容感覚精度との関連性，第39回VR心理学研究委員会，2021年8月21日(オンライン)。

飯嶋秀治，口承を超える民俗学——視覚障害研究から，日本民

Y., Kanemaru, K., Ishii, K., Shigenobu, K., Sunada, Y., Kawakatsu, S., Matsukawa, N., Takahashi, R., Tomimoto, H., Inoue, H., Phase 1/2 trial of bromocriptine in Alzheimer’s disease with presenilin 1 mutations (REBRAnD), 第65回日本神経学会学術大会, 東京, 2024年5月29日–6月1日.

河原美彩子, 鈴木敦命, 感情経験の年齢ステレオタイプが高齢者と若年者の顔からの表情認知に及ぼす影響, 日本感情心理学会第32回大会, 泉南, 2024年5月31日–6月2日.

鈴木敦命, 石川健太, 大久保衛亜, 直感的信頼の年齢関連差——米国政治家の顔画像を用いた概念的追試, 日本感情心理学会第32回大会, 泉南, 2024年5月31日–6月2日.

武内俊樹, 鈴木敦命, 物語読書による共感回避の低減, 日本感情心理学会第32回大会, 泉南, 2024年5月31日–6月2日.

塚本恭平, 石川健太, 大久保衛亜, 鈴木敦命, 顔情報道具的効用に関する信念と顔情報希求行動の関連, 日本感情心理学会第32回大会, 泉南, 2024年5月31日–6月2日.

小野真由子, 井藤佳恵, 増井幸恵, 権藤恭之, 神出計, 池邊一典, 樺山舞, 赤坂憲, 新井康通, 石崎達郎, 高齢者が抱く感謝の発達と人生満足度に及ぼす影響——SONIC研究70歳コホートおよび性差に着目した検討, 日本老年社会科学会第66回大会, 奈良, 2024年6月1日–2日.

菊澤佐江子, 筒井淳也, 年齢アイデンティティとその関連要因, 日本老年社会科学会第66回大会, 奈良, 2024年6月1日–2日.

増井幸恵, 安元佐織, 権藤恭之, 中川威, 小川まどか, 吉田祐子, 稲垣宏樹, 井藤佳恵, 池邊一典, 神出計, 石崎達郎, 地域高齢者における百歳到達希望と老年の超越の関連の検討——SONIC研究データを用いて, 日本老年社会科学会第66回大会, 奈良, 2024年6月1日–2日.

渡邊大輔, 生活支援コーディネーターの働きがいの規定因——構造方程式モデルをもちいた全国オンライン調査データの検討, 日本老年社会科学会第66回大会, 奈良, 2024年6月1日–2日.

田中慶子, 安元佐織, 「長寿願望」があるのはどのような人か? ——「中高年期の家族生活についての全国調査(NFRJ-S23)」の分析(5), 第97回日本社会学会大会, 京都, 2024年6月1日–2日.

Morihara, D., Moriya, J., Kagitani, F., Uchida, S. Cerebral blood flow responses to trigeminal olfactory stimulation and its nicotinic cholinergic regulation, 第47回日本基礎老化学会大会, 東京, 2024年6月15日–16日.

Moriya, J., Morihara, D., Kagitani, F., Uchida, S. Effect of basal forebrain stimulation on regional blood flow in the piriform cortex, 第47回日本基礎老化学会大会, 東京, 2024年6月15日–16日.

内田さえ, 体性——自律神経反射からわかる鍼灸の作用機序, 第120回日本精神神経学会学術総会／オンデマンド配信限定セッション, 札幌, 2024年6月20日–22日.

北崎充晃, パーチャル共身体化における心理特性と運動特性, 日本人間工学会第65回大会, 千歳, 2024年6月22日–23日.

寺岡諒, 黒田尚輝, 寺本渉, 接近移動音像における聴覚の身体近傍空間の方位依存性の検討, 音楽音響研究会, 北海道, 2024年7月6日–7日.

土橋彩加, 竹中將起, 田島知之, 大谷洋介, 林浩介, 池上知之進, 松本卓也, 冬期の上高地におけるニホンザルとホンドギツネの接近事例の報告, 第40回日本霊長類学会大会, 仙台, 2024年7月12日–14日.

長原衣麻, 竹中將起, 吉田匠, 土橋彩加, 林浩介, 東城幸治, 松本卓也, 行動観察および糞中DNA解析による, 上高地ニホンザルの採食する昆虫相の解明, 第40回日本霊長類学会大会, 仙台, 2024年7月12日–14日.

松永篤知, キャンパスに刻まれた5千年の痕跡——金沢大学構内遺跡からみた先史・古代・中世・近世・近代一, いにしえの世界を探る——金沢大学 古代文明・文化資源学フォーラム2024,

金沢, 2024年7月27日.

田中優希, 寺岡諒, 寺本渉, 距離方向に対する聴覚的注意の方位依存性の検討, 日本音響学会2024年秋季研究発表会, 大阪, 2024年9月4日–6日.

寺岡諒, 黒田尚輝, 寺本渉, 聴覚接近刺激の到来方向が身体近傍空間表象に及ぼす影響, 日本音響学会2024年秋季研究発表会, 大阪, 2024年9月4日–6日.

増田柚衣, 朴白順, 上野仙経, 高橋賢人, 上田敬太, 村井俊哉, 月浦崇, びまん性軸索損傷患者における連合推論に関する検討, 第48回日本神経心理学学会学術集会, 京都, 2024年9月5日–6日.

川越敏和, 黒田尚輝, 原田新也, 寺岡諒, 寺本渉, パーソナルスペースと加齢, 日本心理学会第88回大会, 熊本, 2024年9月6日–8日.

川越敏和, 黒田尚輝, 原田新也, 寺岡諒, 寺本渉, 錯覚生起動作の能動性は身体位置知覚の時間特性に影響するか, 日本心理学会第88回大会, 熊本, 2024年9月6日–8日.

原田新也, 日高聡太, 川越敏和, 浅井暢子, 寺本渉, 年齢, 身体運動機能と内受容感覚との関連——オンライン調査による自己評価に関する検討, 日本心理学会第88回大会, 熊本, 2024年9月6日–8日.

中村純也, 北崎充晃, 多様な姿勢に対応したワイヤレス足裏振動デバイスによるパーチャル歩行体験, 第29回日本パーチャルリアリティ学会大会, 名古屋, 2024年9月11日–13日.

澤田知恭, 原田悦子, 会話中の二重課題と発話エラーの関連の検討——年齢群間比較, 日本認知科学会第41回大会, 東京, 2024年10月12日–14日.

内田さえ, 森原大智, 桜井良太, 鍵谷方子, 鈴木宏幸, 高齢者の嗅覚弁別機能と心臓自律神経機能との関連性の解明, 第77回日本自律神経学会総会, 京都, 2024年10月25日–26日.

森原大智, 鍵谷方子, 内田さえ, 三叉神経系嗅覚刺激による脳血流反応および加齢変化の解析, 第254回生理学東京談話会, 東京, 2024年11月2日.

坂野晴彦, 奥宮太郎, 近藤孝之, 網野祥子, 中倉章祥, 多田春江, 森田智視, 新堂晃大, 眞木崇州, 池田学, 和泉唯信, 金丸和富, 石井賢二, 繁信和恵, 砂田芳秀, 川勝忍, 松川則之, 高橋良輔, 富本秀和, 井上治久, iPS細胞を用いた家族性アルツハイマー病の医師主導治験, 第42回日本神経治療学会学術集会, 幕張, 2024年11月7日–9日.

渡邊大輔, 退職年齢の希望と想定に違いはあるのか? ——「中高年期の家族生活についての全国調査(NFRJ-S23)」の分析(2), 第97回日本社会学会大会, 京都, 2024年11月9日–10日.

李雯雯, 成人子との関係良好性はどのように決まるのか? ——「中高年期の家族生活についての全国調査(NFRJ-S23)」の分析(3), 第97回日本社会学会大会, 京都, 2024年11月9日–10日.

Cheng Zuorong, 中川威, 権藤恭之, QOLにおけるプロアクティブ動機づけとライフ・クラフティング——直接効果、媒介効果および調整効果の検討, 第19回日本応用老年学会大会, 東京, 2024年11月9日–10日.

角田百穂, 中川威, 権藤恭之, 選択的最適化補償理論(SOC)の日本語版短縮尺度の作成, 第19回日本応用老年学会大会, 東京, 2024年11月9日–10日.

内田さえ, 認知的フレイルの早期発見と予防に向けた嗅覚研究, 日本情動学会第13回大会, 神戸, 2024年11月9日–10日.

大須賀拓真, 江川美保, 高橋由光, 池田裕美枝, 露木香, 金谷久美子, 丹羽房子, 平林今日子, 中山健夫, 万代昌紀, 環境省エコチル調査における妊娠初期の低MCVと周産期メンタルヘルスとの関連——鉄欠乏に関する考察, 第39回女性医学学会学術集会, 宇都宮, 2024年11月9日–10日.

露木香, 大須賀拓真, 池田裕美枝, 江川美保, 万代昌紀, PMS/PMDDを評価する日本語尺度のスコーピングレビュー, 第39回女性医学学会学術集会, 宇都宮, 2024年11月9日

–10日.

黒田尚輝, 原田新也, 寺岡諒, 寺本渉, 錯覚生起動作の能動性は身体位置知覚の時間特性に影響するか, 第15回多感覚研究会, 東京, 2024年11月16日–17日.

寺岡諒, 黒田尚輝, 寺本渉, 聴覚による身体近傍空間の加齢変化の検討, 第15回多感覚研究会, 東京, 2024年11月16日–17日.

原田新也, 寺岡諒, 黒田尚輝, 寺本渉, 加齢は両耳間レベル差に基づく聴覚運動知覚に影響しない, 第15回多感覚研究会, 東京, 2024年11月16日–17日.

露木香, 大須賀拓真, 江川美保, 健康女性における月経周期に伴う自律神経活動の変動の検討, 第8回臨床自律神経機能Forum, 川崎, 2024年11月29日–30日.

鈴木敦命, 石川健太, 大久保衛亜, 顔に基づく直感的信頼の年齢関連差のextended Social Relations Modelによる分析, 日

講演

Watanabe, D. Supporting older people in the community in England and Japan, Daiwa Anglo-Japanese Foundation, London, UK, 1 February 2022.

近藤祥司, 三河拓己, 細胞老化とセノリシス, 日本農芸化学会2023年度大会, 広島, 2023年3月14日(オンライン).

筒井淳也, 日本における少子化対策の評価とあるべき方向性——「人口減少 80万人割れの衝撃」(2), 日本記者クラブ, 東京, 2023年4月24日.

小山竜司, 社会教育と生涯学習——公民館の果たす役割, 岡山県公民館連合会 令和5年度第1回研修会, 岡山, 2023年5月23日.

近藤祥司, 三河拓己, 老化細胞の病的生存に重要な代謝変容とその修復, 第9回がん代謝研究会, 松山, 2023年5月31日.

内田さえ, 鍼の基礎研究から臨床への展望, 第72回全日本鍼灸学会学術大会, 神戸, 2023年6月11日.

Kondoh, H., Mikawa, T. Elimination of aberrantly-survived senescent cells alleviates aging-related disorders, IAGG Asia/Oceania Regional Congress 2023, Yokohama, Japan, 14 June 2023.

内田さえ, 嗅覚による認知症の早期診断システム開発に向けて, 第11回TOBIRA研究交流フォーラム, 東京, 2023年7月28日.

月浦崇, 「生涯学」の創出へ向けて——超高齢社会における加齢観の刷新をめざす学際的研究, 第19回「必須脂肪酸と健康」研究会, 京都, 2023年7月28日(ハイブリッド).

内田さえ, 認知症とにおいの関係, 済生会中央病院・第26回認知症ケアセミナー, 東京, 2023年9月26日.

内田さえ, 香りで脳の活性化, 小金井市悠々クラブ連合会・健康講演会, 東京, 2023年10月13日.

月浦崇, 「生涯学」の創出へ向けて——超高齢社会における加齢観の刷新をめざす学際的研究, 第38回日本老年精神医学会特別講演Ⅰ, 東京, 2023年10月13日.

月浦崇, 神経心理学に関連する心理学・神経科学に関する知識, 第5回臨床神経心理士講習会, 2023年10月27日(オンライン).

月浦崇, 認知予備力からみる超高齢社会における新しい生涯観, 第47回日本高次脳機能障害学会学術総会, 仙台, 2023年10月29日.

近藤祥司, 三河拓己, 細胞老化とその生物学的意義, 第96回日本生化学会大会, 福岡, 2023年11月1日.

坂野晴彦, 未病を在宅で検知する「身体天気予報」をデジタル機器で, 第90回みんラボカフェ, 筑波, 2023年11月1日.

近藤祥司, フレイル・サルコペニアマーカーとしての血液メタボライト, 第10回日本サルコペニア・フレイル学会大会, 東京, 2023年11月4日.

Kasai, Y. Local communities and pilgrimage associations: A case

本基礎心理学会第43回大会, 松山, 2024年11月29日–12月1日.

李雯雯, 国籍や性別による在日外国人の家族形成状況の違い, 比較家族史学会第75回秋季大会, 仙台, 2024年11月30日.

三谷はるよ, ACEsの悪影響を緩和するPCEsの保護要因としての役割——日本における大規模質問紙調査から, 日本子ども虐待防止学会第30回学術集會かがわ大会, 高松, 2024年11月30日–12月1日.

Zhou, Y., Matsui, M., Kinoshita, M., Saito, D., Takiguchi, Y., Ebina, K., Nakada, M. Does sports/exercise experience affect current cognitive function, social function and resting brain activation?, 第59回北陸心理学会大会, 金沢, 2024年12月14日.

滝口雄太, 松井三枝, 加齢に伴う社会的認知の個人差について考える——認知機能および認知予備力の役割に着目して, 第59回北陸心理学会大会, 金沢, 2024年12月14日.

study of Iseko, International Academic Forum “Asian Spirits in Culture”, Kuala Lumpur, Malaysia, 21 November 2024.

笠井賢紀, 地券取調総絵図の史料特性と可能性——栗東市域を事例に, 龍谷大学里山学研究センター公開研究会「よみがえる明治初期の山村の土地利用——永源寺地区の地券取調絵図(地引絵図)が語るもの」, 東近江, 2023年11月25日.

月浦崇, 報酬へのモチベーションによって影響を受けるヒト記憶の神経メカニズム, 2023年度こころサイエンスカレッジ「動機——選好・感情」, 京都, 2023年12月8日.

朴白順, 外傷性脳損傷患者における動機づけの障害とその影響, 2023年度こころサイエンスカレッジ「動機——選好・感情」, 京都, 2023年12月8日.

筒井淳也, 高齢期における孤独・孤立の実態と要因——社会学の観点から, 一般公開シンポジウム「超高齢社会における加齢観の刷新による社会的孤立・孤独の一次予防」, 仙台, 2023年12月23日.

江川美保, 月経随伴症状とその治療に関連するメンタルヘルス——エビデンスと患者一人ひとりの物語り, 第45回日本エンドメトリオーシス学会学術講演会, 東京, 2024年1月20日.

三浦貴大, 視覚障害者が音で見る世界, 日本音響学会 2024年1月度 聴覚研究会・音声コミュニケーション研究会 共催研究会, つくば, 2024年1月29日.

江川美保, プレコンセプションケアとしての PMS/PMDDマネジメント, 第37回日本女性心身医学会研修会, 2024年2月3日(オンライン).

笠井賢紀, 滋賀県栗東市での研究と活動——PBL, アクションリサーチ, バブリックヒストリー, 第21回田園都市線沿線談話会, 川崎, 2024年2月10日.

江川美保, 女性医療における包括的な鉄欠乏対策の意義と方法, 下京西部医師会第80回プライマリケア・ケア教育の会, 2024年2月21日(オンライン).

江川美保, 月経関連症状の最新の知見と支援, 日本母性看護学会WHC実践セミナー, 2024年2月24日(オンライン).

松永篤知, 周辺分野から弥生時代の暮らしの編物について考える, 下之郷史跡公園 弥生人養成講座——「弥生の技」, 守山, 2024年3月2日.

江川美保, がん治療後のより良い生活, 快適な毎日を, 公益社団法人SGH財団第22回市民公開講座, 2024年3月3日(オンライン).

三浦貴大, 松尾政輝, 上田麻理, 聴覚情報を活用した視覚障害スポーツ／eスポーツの競技力向上, 日本音響学会 第151回(2024年春季)研究発表会, 東京, 2024年3月7日.

Vanderheiden, G., Miura, T., Kushalnagar, R., Miesenberger, K. Research Trends, 39th Annual CSUN Assistive Technology

Conference (CSUN ATC 2024), California, USA, 21 March 2024.

江川美保, 鉄欠乏対策による女性ヘルスケアの土台づくり, Evolution Seminar——鉄が変える未来, 2024年3月25日(オンライン).

江川美保, 月経随伴症状——今の治療は、未来をも拓く, 広島県中部地区産婦人科医会学術講演会, 東広島, 2024年3月27日.

木村亮, ウィリアムズ症候群——健康上の問題とその対応, 難病を持つ方とその家族を支えるシンポジウム2024, 奈良, 2024年4月6日.

柴田悠, これからの少子化対策——「若者の賃上げ」「男性の働き方改革」「育児支援」, 国会・衆議院「地域活性化・こども政策・デジタル社会形成に関する特別委員会」参考人意見陳述, 東京, 2024年4月9日.

Yasui, M. Visualizing Fetus in Early Modern Japan, Donald Keen Center at Colombia University, NY, USA, 18 April 2024.

江川美保, 月経随伴症状の診断と治療, 第76回日本産科婦人科学会学術講演会, 横浜, 2024年4月21日.

江川美保, 月経随伴症状——今の治療は、未来をも拓く, 第625回 松山産婦人科医会 オンライン講演会, 2024年4月24日(オンライン).

近藤祥司, 老化と対話する医療から新しい健康概念へ——寿命の進化論的考察より, 京都大学 公開講座 京大知の森「人生100年の道のり——『老い』の見方を変える」, 京都, 2024年4月27日.

月浦崇, 生涯学——加齢観の刷新をめざす学際的研究, 京都大学 公開講座 京大知の森「人生100年の道のり——『老い』の見方を変える」, 京都, 2024年4月27日.

江川美保, HRTの効果を上げる更年期女性のみかた, 第155回東北連合産科婦人科学会総会・学術講演会, 盛岡, 2024年5月19日.

江川美保, 月経前症状を「サイン」とみて健康度をあげるPMSのミカタ, 株式会社KINSイベント講演, 東京, 2024年5月26日.

内田さえ, 鍼灸の脳血流に及ぼす効果, シンポジウム11『脳科学と心のケア』, 第74回日本東洋医学会学術総会, 大阪, 2024年6月2日.

三河拓己, 近藤祥司, 細胞老化・個体老化に伴う代謝レジエンスの変容機構とその応用, 第66回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2024年6月14日

近藤祥司, メタボロミクスによるフレイルバイオマーカー探索, 第66回日本老年医学会学術集会, 名古屋, 2024年6月15日.

Nakayama, M. Decoding daily well-being in Japan, Kyoto University – University of Vienna Joint Symposium on Global Health, Vienna, Austria, 19 June 2024.

江川美保, 月経前不快気分障害(PMDD)のミカタ——精神科と産婦人科の協働をめざして, 令和6年度京都精神神経科診療所協会学術講演会, 京都, 2024年6月29日.

Kitazaki, M. Multimodal information for virtual walking, The 16th Asia Pacific Conference on Vision (APCV2024), Symposium: The impact of recent technologies on studies of multisensory integration, Singapore, 11 July 2024.

江川美保, 働き盛りの女性におけるメンタルヘルスと生活習慣病——PMS・PMDDの観点から, 徳島保健所かかりつけ医と精神科医の連携事業(東部圏域研修会), 2024年7月18日(オンライン).

江川美保, 心の健康を重視した生涯にわたる女性のヘルスケア, 京都大学医学部附属病院 開設125周年記念市民公開講座第1回, 京都, 2024年8月11日.

江川美保, 女性のメンタルヘルス不調と貧血のない鉄欠乏, 第48回日本鉄バイオサイエンス学会学術集会, シンポジウム2「鉄欠乏がもたらす多様な作用——遺伝子発現からメンタルヘルスまで」, 京都, 2024年8月31日.

江川美保, 働く女性の更年期, 第52回日本女性心身医学会学術集会, シンポジウム「心身医学的に更年期障害を診る」, 東京, 2024年9月1日.

坂野晴彦, 基礎と臨床をつなげて新しい医療をつくる, 京都大学医学部附属病院 先端医療研究開発機構 AROインターンシップ, 京都, 2024年9月3日.

松井三枝, サードエイジを考える——60歳からの生き方, 金沢ボランティア大学校, 金沢, 2024年9月14日.

近藤祥司, 老化と対話する医療から新しい健康概念へ——寿命の進化論, アンチエイジングからNMN, セノリシスまで, 日本臨床内科医学会, 教育講演2, 京都, 2024年9月15日.

Tsukiura, T. Neural mechanisms underlying face-related memories modulated by social rewards in human participants, The NIPS Research Meeting 2024 “New Developments in Learning and Memory Research through Diverse Approaches”, Okazaki, Japan, 18 September 2024.

江川美保, 周産期メンタルヘルスの向上を目指したプレコンセプションケアとしての月経対策, 第1回日本外来精神医学学会学術総会, 東京, 2024年9月23日.

近藤祥司, 遺伝子から見る老化, 老化から診る疾病——寿命の進化論的考察, アンチエイジングからセノリシスまで, 第50回京都医学会, シンポジウム『老化と対話する医療から新しい健康概念へ』, 京都, 2024年9月29日.

江川美保, PMSの取り扱い——漢方 vs LEP-漢方, 第148回関東連合産科婦人科学会総会・学術集会, 松本, 2024年10月20日.

倉田誠, サモア独立国における「障害」概念の受容——「生涯学」の視点から, 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター研究会, 鹿児島, 2024年10月24日.

江川美保, プレコンセプションケアとしての鉄欠乏&月経前症候群マネジメント——産後うつ病のリスク低減をめざして, 第20回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会, 東京, 2024年10月26日.

江川美保, 漢方療法を通して再考するPMS/PMDDへのアプローチ——胃腸と栄養への着目, 富山県産婦人科医会学術講演会, 2024年10月31日(オンライン).

月浦崇, ヒトのエピソード記憶に影響を与える社会的文脈とその神経メカニズム, 第48回日本高次脳機能学会学術総会, 八王子, 2024年11月8日.

倉田誠, 医療人類学の立場から——健康をめぐる自己責任論の問題点, 生活習慣病を死語にする会主催・市民公開シンポジウム2024「不健康をスティグマ化する自己責任論を乗り越えるための声を結集する」2024年11月9日(オンライン).

近藤祥司, 老化と対話する医療から新しい健康概念へ——寿命の進化論的考察, アンチエイジングからセノリシスまで, 老年医学会近畿地方会・教育講演, 京都, 2024年11月16日.

江川美保, 漢方療法を通して再考するPMS/PMDDへのアプローチ——胃腸と栄養への着目, 道北産婦人科医会11月学術講演会, 2024年11月22日(オンライン).

江川美保, 自分をいたわるセルフ・モニタリングのすすめ, つながるスペース 女性のための健康と暮らしの相談セミナー, 京都, 2024年12月1日.

月浦崇, 社会的文脈におけるヒト記憶の基盤となる神経メカニズムとその加齢変化, 加齢研研究員会DATEセミナー, 仙台, 2024年12月4日.

近藤祥司, 老化と対話する医療から新しい健康概念へ, ビタミン・バイオフィクター協会・市民公開講演会, 京都, 2024年12月14日.

原田悦子, 高齢者-若年成人間比較から見てきた「人がモノを使うということ」——人-人工物間相互作用の年齢群間比較研究の勧め, 電子情報通信学会 ヒューマン情報処理研究会(HIP), 2024年12月16日.